

乳幼児期の育ちと保育を考える

4  
2008

# 幼児の教育



好評発売中!

## フレーベル館 創立100周年記念出版

-----幼児教育とともに歩んできた100年  
そして未来の子どもたちを支える100年に-----

キンダーブック昭和の童謡童画集

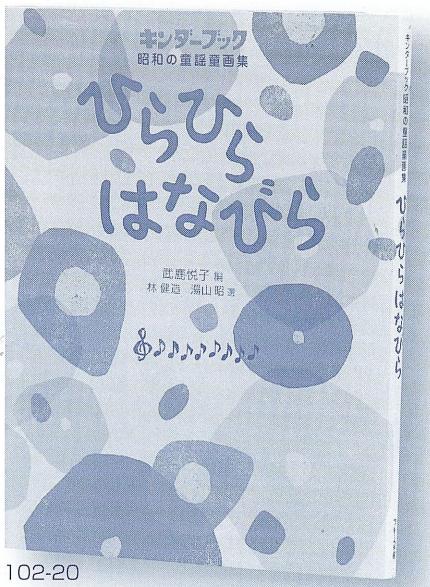
# ひらひら はなびら

編／武鹿悦子

選／林 健造 湯山 昭

昭和2年の「お米の巻」創刊から80年。

キンダーブックはたくさんの創作童謡に  
すばらしい童画を添えて子どもたちに届  
けていました。一流の作家が腕を振るって  
いた昭和期の童謡童画に光をあてた珠玉の  
1冊。キンダーブックを読んできたすべて  
の世代に贈ります。



102-20

29×22cm／200頁

定価3,150円(税込)

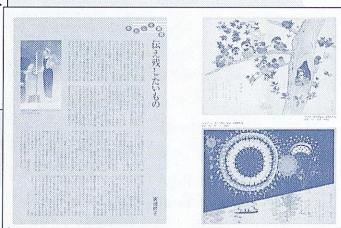
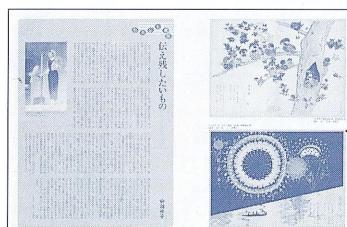
詩人

まど・みちお、  
西條八十、阪田寛夫 ほか

コラム筆者に、  
太田大八、大中 恩、  
黒井 健、谷川俊太郎、  
安田祥子、山本容子など

童画家

武井武雄、初山 滋、  
いわさきちひろ ほか



キンダーブックの  
**フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第107巻 第4号



乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

第107巻 第4号

## もくじ

巻頭言

私の意識変革

千羽喜代子

特集

子どもとメディアの出会い

子どもと絵本

百々佑利子

映像メディアとどうつきあうか

向田久美子

絵本から広がる「ミニユニークーション

藤津麻里

"考え方ながら見る" テレビ

工藤俊二

絵本作りの原点

永山 綾



34

保育の場で共に育つ「場」を支える「対話」  
子どもと保育の情景  
(16)

高嶋景子

新たな子どもたちとの出会いの季節に

戸田雅美

上海↔東京 子育てメール便(2)

橋本雅子・津守多実

保育の現場から

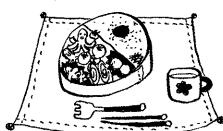
「カメさん、おはよう!」が始まった幼稚園

黒川 愛

お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み  
(16)

TURKISH DELIGHT(2)

菊地知子



## 巻頭言

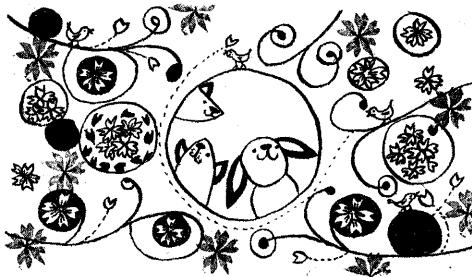
# 私の意識変革

千羽喜代子

世に生命なく力なきもの惰性の如きはない。それが仮令よき内容をもつていても、惰性化するまでに古びたものは、その内容に於ても、必ず考え直しの時期に迫られている。

よくもまあ旧態依然としていられると思う。よくもまあ無再考がつづけられるものだと思う。中味のよし悪よりも、余りの定型と伝襲性とに驚く。——これでは、先ず誰よりも子どもたちがたまるまい。硬化と弛緩ほど子どもの大嫌いなものはないからである。

ゴムが徽臭くこちこちと固まつてしまつてしている毬、気が抜けてたるんで少しも弾まなくなつてしまつている毬、流石に子どももうんざりさせられるであろう。古ぼけたゴム毬は取りかえてやればいい。惰性化した教育は内から弾力を盛りかえすほかはない。教育は子どもに与えるものである。自らを新たにする努力を欠いた教育を与えるほど、子どもに氣の毒のことはない。むしろ無残である。



右の文章は倉橋惣三先生が、「自らを新たにする努力」と題して書かれた短文である（『倉橋惣三選集 第三巻』フレーベル館 五十三頁）。教職歴三十五年にある者にとつては、自戒の意味を込めて座右に置きたい文章である。

ところで、私たち教師が授業において黒板を最小限度に使用することになったとしたら、私たちはどのように対応するであろうか。実は、私はこの半年間、この課題に立ち向かったのである。その理由から述べることにする。

当節では、どちらの大学でも実施しているFaculty Development (F.D. 教育内容・方法の改善の向上への取り組み) の本学での研修会で、社会が求める専門的知識と幅広い教養を身につけた思考力・問題発見・解決力のある学生を育てるなどを目的とした授業方法が検討されている渦中に入ったとき、私は約二〇項目程度の具体的な授業進行の中から一つを選択した。それが黒板の使用であつた。板書の字が下手で、読みにくいことが、その選択の理由である。

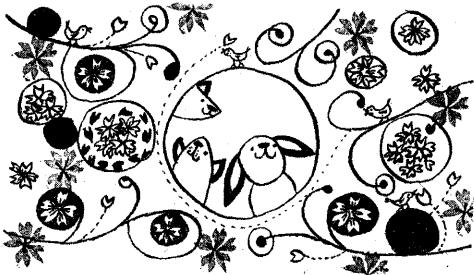
それまでは何の疑問をもつこともなく、黒板に板書することを主体として授業を進めてきた。しかし、「黒板の使用を最小限度にし、むしろ教師ではなく、受講している学生に使用させる」と、自分の中で決めたとき、改めて黒板にのみ依

存して授業を進めていた自分に気がついたのである。

そこで講じなければならない方法として、①学生たちに伝えたい担当科目に関する情報や知識の伝達・方法を「何によって」「どのように」行うか ②学生を授業の主体者にするには「どのような方法をもって授業を進行すればよいか」を中軸に置いて、授業の毎時間は静かな格闘のときであった。教材や授業時間の配分に考慮し、学生たちを「どこで」「どのような方法で」授業に参加させていくかなど、準備にかなりの時間を要した。第三者から見れば、この程度のものかと評されるかもしれないが、私としては精一杯の努力であった。たとえば、机間巡視や学生との対話の必要性は充分にわかつていても、七十歳を越えたこの老体には、かなりの重労働である。

しかし、この実践から大変に貴重な賜物を頂いた。

①黒板使用中心の授業は、何と、教師主導の授業になりやすいこと。受講生の理解、興味・関心、考え方などを考慮するよりも教師の意図が優先して授業が進められていたこと ②学生を授業の主体者とするための授業方法、授業内容を真剣に考え始めたこと ③充分ではないが、これまでよりも学生の興味・関心や理解度がわかり始めたこと ④現在、本学に就任して二年半になるが、過去二年間の私の授業に対する学生の評価は、「授業が難しい」という声が三分の一だった



のが、その声が消え、「頑張ってください」というエールを送つてくる学生が現れたこと。

今後の私の課題は、如何に授業内容の質を落とさないで、この状態を進めていくかにある。反省としては、学生に専門知識を学習させなければならないとはいえ、盛りだくさんの知識を与えてきたように思う。私の講義内容は彼らの頭上を通り抜けていたのである。高等学校を卒業して間もない、入学したばかりの学生に対しての配慮が欠けていた。将来、保育者として子どもたちの保育・教育に携わる者たちの基礎をつくるために、レベルを落とすことなく、わかりやすい授業を行うには、まずは講義内容の精選から始める必要がある。そしてまた一方では、教育する側にある者として、相手を学習の目標に向けて「方向づける」ことが求められる。「何を」「どのように」方向づけるか、模索が続くであろう。

授業の中で、子どもたちと触れ合い、子どもたちの気持ちや状態や状況を充分に理解することから保育は始まると言っている私自身が、教育の対象者である学生を抜きにした授業展開をしていた状態に対し、冒頭に引用した倉橋惣三先生の文言を引くなれば、まさに、「考え方の時期」に迫られていたのである。私の自らを新たにする努力は、学生との共同の下で地道な歩みを進めていくことにある。

特集 子どもとメニアの出会い

## 子どもと絵本

百々佑利子



幼児が絵本をどう受容し、評価するかを判断するのは困難です。「もつと（読んで）」という言葉こそ、肯定的な評価であるともいわれます。絵が好きなのか、物語がおもしろいのか、あるいは読み手と一緒にいるのがうれしいのか、その全部がもう一度

が安定していない乳幼児の知覚および表現の制約を乗り越えるという命題があります。けれどそもそも子どもはみな、注意力、集中力が不安定なのでしょうか。

私がそのことを考えるようになつたきっかけは、読んでという要求の理由なのか、きいても、子どもの答えは日々変わることでしょう。自身やわが子と絵本にまつわる記憶は断片的であります。科学的かつ継続的な観察も、知覚面での注意力や集中力

およそ四半世紀前に、ポリネシア系先住民の口頭伝承のフィールドワークをするために訪れたニュージーランドでの、ある書物との出会いでした。当時の関心は、本とは対極にある無文字民族の語りに

## 特 集

あつたのです。旅の終わりに、子どもの発達と絵本についての研究論文を出版したドロシー・バトラーに会いました。

彼女はリードティング・センターで、本に苦手意識をもつ、就学しても読み書きに苦労している子どもたちに、独自に開発した方法で、絵本のテキストを読むトレーニングを行っていました。私が訪ねたとき、バトラーの論文が『クシユラの奇跡 一四〇冊の絵本との日々<sup>1)</sup>』のタイトルで出版されたばかりでした。重い障害をもつクシユラという名の女の子の誕生から三歳九か月までの成長と、その間に絵本に示した反応の克明な記録です。毎日十五分あるいは三〇分おきに記されたメモをもとに、子どもの成長と絵本とのつながりを解き明かしています。同書は障害児であるなしにかかわらず、幼い子どもの読書と本に貢献した著作に与えられるエリノア・ファージョン賞(英国)を受賞することになります。

親は、クシユラが生後四か月のときに初めて絵本を見せました。そしてクシユラは「本を見ようとする意志を示し、全身を耳にして」聞きました。八ヵ月から九か月のころ、自分から要求もするようになりました。「お気に入り」の対象物を吟味するときの集中力はすさまじかったとの記録があります。抱かれながらかすかに体をのけぞらせるのは、壁のカレンダーが見たいという意志の表明でした。絵の下に並ぶ黒い数字に目の焦点を合わせ、数字を一つずつ何分もかけて注意深く調べました。

同時期に、絵本を長時間にわたって見せる習慣も定着しました。この習慣は一日二〇時間も抱いていなければならぬ重度の心身障害児をもつクシユラの親にとって、精神的な支えとしても有効でした。本を見せるとき、クシユラの保育にあたった大人(両親・祖父母・叔父叔母・親の友人・近隣の人々)はクシユラを抱っこし、背を胸でしつかり支

え、ずり落ちないようにし、おもて表紙から裏表紙まで読みました。クシュラは、どのページもなめますように隅から隅まで見ましたが、絵の一か所に

く快さの繰り返し体験でした。親子の絆を結ぶのに絵本が大きな役割を果たしたのはいうまでもあります。

視線がくぎ付けになることもありました。たとえば『かぞえてみよう<sup>2)</sup>』（ブルーナ）の白いページにぼつんと記された数字です。絵を見てほほ笑むわけではなく「つねに真剣に集中」しました。ところがリズミカルな詩、たとえば『ふくろうとこねこ<sup>3)</sup>』（リア）を読んでもらうとき、読み手の大人が無意識に体をゆするのに合わせて、聞き手のクシュラも神経は集中しながらも弾む気持ちを足の動きで伝えました。好みはしだいにはつきりし、「腕を振つたり足をばたばたさせ」て喜びと興奮の感情を伝えるようになりました。そういう本はどれも何百回も読まれたといいます。

絵本を見せてもらい読んでもらうことは、未だ知らない世界を目（絵）で見て確かめる「代償プログラム」であり、懷に抱かれて愛情のこもった声を聞

く快さの繰り返し体験でした。親子の絆を結ぶのに絵本が大きな役割を果たしたのはいうまでもあります。

そして、クシュラが一歳になつたとき、突然、名詞の最初の音（ファイツシユのf、ピッグのp）を発音しました。絵を指しながらなので、大人にもfは魚を、pは豚を意味するとわかりました。一歳半のときのテストでは、無聲音を明確に発音することができます。いかに注意深く本の言葉を聞いていたかがわかります。それと同時期、『でも、みどりのおうむはどこにいるの？』（ツアハリアス）の絵の中でおうむを見つけると両手を打ち合わせ、声を立てて笑いました。ただしこの子の場合、興奮や喜びの感情は、親の体にかすかに伝わる動きからそれと理解できる程度であり、手を打ち合わせるのも本当に弱々しくでしかありませんでした。体を密着させて、子どもの体が発する微弱な信号を親が受け止め記録していたからこそわかる変化でした。

## 特 集

子どもと絵本について、この事例は何を伝えているでしょうか。まず、絵や数字も含めた「言語体験」の紹介にふさわしい媒体である絵本の導入時期です。一般的に子どもは生後半年以降に、自力で探検や発見をしようと、体の向きを変えたり、はいはいしたり、つかまり立ちをしたりと、活躍の時期を迎えます。そういう段階にある動き回りたい子をひざの上に抑えつけようとしても無理で、本は玩具と同じ扱いをされるでしょう。まだじつとしている時代、世界がベッドの周りにしか展開していない時代に、絵本の時間を離乳食やミルクと同じように欠かせない日々の営みの一つに入れることは、もし絵本が、そして長じて文字文化が、子どもの生涯に何らかの貢献をすると信じるのであれば効果的です。

言語の獲得や人間の心情の深い理解以上に大切なことはありません。それが早い時期からの「本と一緒に過ごす時間」に身につきます。

次に子どもの集中力についてです。事例の子ど

も、クシュラは、四か月のときに、絵本の言葉を強い意志をもつて全身を耳にして聞きました。集中力を發揮したのです。数の本を見たから数字や計算を覚えるわけでもなく、リアのユーモアが理解できる（いずれそうなつてほしいが）わけでもありませんが、日々高められる注意力と集中力は、自らの意志の発露にも活かされます。幼いときからの読書は、人間の生涯を支えるのだろうと思います。

クシュラの記録に戻ると、十八か月の章は、「あらゆる障害にもかかわらず、幸せな子どもになりつつあった」と締めくくられます。「よく笑い、ぐあいが良いひとときは楽し」みました。どの子にも与えられるべき幼児時代を過ごすようになったのです。

著者はここで、『五歳前にあたえる本<sup>5)</sup>』(D・ホワイト)の、健康で利発な子、キヤロルとの比較を試みます。キヤロルは、一人称で語られる物語の「ぼく」や「わたし」が誰のことか、大人を質問攻めに

して説明を要求しました。知らない言葉をそのままにしておくことはありません。クシュラのほうは何でも丸ごと受け容れました。キヤロルの鋭い知性は「言葉」というものは、明確で具体的なものを意味する」と定義し、そのためにノンセンス・ソングは拒否しがちでした。一方クシュラは、何時間でも詩や物語を聞きたがり、ノンセンスな詩の磨き抜かれたリズムに感覚的に反応しました。「つまり」と著者はいいます。「五感に訴え、解説を必要としない言葉や文体を愛する喜びは、厳として存在する：子どもたちの言語感覚は、音楽的感性と同様で、あらわれ方に広い幅があるというのが、確かに真実である」。

二人とも二歳九ヶ月のときに『ピーター・ラビットのおはなし』（ポター）に出会い、「もう一度読んで」と繰り返す愛読書になりました。ピーターうさぎがじょうろに隠れ、耳だけしか描かれていない場面で、キヤロルは「ほかのところ（体や手足）はどう

こ？」と読み手にききました。クシュラは何も言わないで、親から質問してみました。「この中」とクシュラはじようろを指して言いました。また三歳のキヤロルは、腰から下しか描かれていない母親の絵を見て「ママの頭はどこ？」と質問しました。ホワイトはキヤロルの反応から、「子どもにとつて絵の中にあるものは実在する。絵に描かれていないものは実在しない。だから登場人物の想像の中にのみ存在するものは（絵本に）描かないようにしてはどうか」と提案します。しかし、バトラーは享受できないもののほうが多い条件下にあり、「絵に描かれたイメージに集中力をかたむけてきた子ども」のクシュラが、想像力という財産を絵本体験によって与えられたと解釈します。

段階的に成長する子どもに段階的に本を選んで与えるという考え方方が概ね共有され、何歳児のときに読む本という勧め方もありますが、飛躍的に開花する可能性もあることを念頭において絵本論も展開さ

# 特 集

れるべきかもしません。キヤロルに比べて質問をしないクシユラですが、この時期の言語テストでは、結合語や複数形も使い、主語に自分の名前を用いる」とはなく、姓名や住所を伝える」ともでおねした。言語の発達は順調でした。キヤロルは活発な子で、本の出番のない日もありました。しかし幼いときに本の魅力を知った人間は、たとえ本を手にする時期が途絶えても、いつかまた本に戻ってきます。キヤロルもそうでした。クシユラはもう大人の女性ですが、本から離れたことはなく、手紙や会話の表現には、物語の作者が練りに練つた言ひ回しや比喩が借用され、その豊かな言語活動は周りに集う人々を笑わせ、感動させ、楽しませていました。

(日本女子大学)

もの成長に当てはめる」とも可能な、文の言葉や「物語る」絵の受容や評価にかかる数々のことが明らかにされました。これも、絵本の功績といわなければならぬでしょう。

子で、本の出番のない日もありました。しかし幼いときに本の魅力を知った人間は、たとえ本を手にする時期が途絶えても、いつかまた本に戻ってきます。キヤロルもそうでした。クシユラはもう大人の女性ですが、本から離れたことはなく、手紙や会話の表現には、物語の作者が練りに練つた言ひ回しや比喩が借用され、その豊かな言語活動は周りに集う人々を笑わせ、感動させ、楽しませていました。

絵本は、キヤロルやクシユラや大勢の子どもたちの人生の質を高めてきました。その上、注意力や集中力や想像力の発達にも重要な役割を果たします。縦断的かつ綿密な)の記録を通じて、すべての子

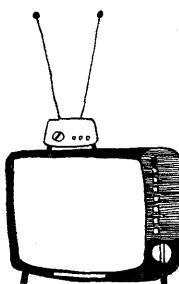
## 註

- 1 CUSHLA AND HER BOOKS by Dorothy Butler, Hodder and Stoughton Ltd., 1979
- 2 I Can Count! by Dick Bruna, Methuen, 1968
- 3 The Owl and the Pussycat, by Edward Lear, Mowbray, 1970 (1871)
- 4 But Where Is the Green Parrot? by Thomas & Wanda Zacharias, Chatto & Windus, 1965
- 5 Books Before Five by Dorothy Neal White, New Zealand Council for Education Research, 1954
- 6 The Tale of Peter Rabbit by Beatrix Potter, Warne, 1902

邦訳版 百々佑利子訳 のぶ書店 一九八四

# 映像メディアとどうつきをあうか

向田久美子



現代の社会は、目まぐるしい勢いで変化を遂げています。中でも、情報技術の発展は著しく、子どもを取り巻く世界を大きく変えました。今、生まれてくる子どもたちは、さまざまな電子メディア——テレビ、ビデオ、携帯電話、パソコン、テレビゲームなど——に囲まれながら育ちます。親世代もテレビやテレビゲームに親しみながら育つた世代ですが、当時と比べると、ハード面においてもソフト面においても格段に選択肢が広がったと言えるでしょう。

このような変化に伴い、テレビやテレビゲームなどの映像メディアが子どもの心身に悪影響を及ぼし

てているのではないか、という懸念も強まっています。小児科医は長時間映像メディアに接触している子どもに、言葉の遅れなどが見られるなどを指摘していますし、視聴時間の長さが注意の欠陥や多動傾向と関連しているという知見も見出されています（ただし、因果関係については、まだはつきりしたこととはわかつていません）。こうしたことから、米国小児科学会は一九九八年に「二歳未満の子どもにはテレビを見せるべきではない」という勧告を出しました。日本小児科学会も二〇〇四年に「乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です」という勧告

## 特 集

を発表しています。これだけ聞くと、子どもにテレビを見せてよいのかと不安に思われる方もいらっしゃることでしょう。

ここではテレビを中心に、最近の研究動向を紹介したいと思います。まず、接触時間について見てみましょう。多くの調査が、乳幼児期の子どもは一日約三時間、テレビ画面に接していることを明らかにしています。もちろん、「ながら視聴」も含みます

デイアと言えるでしょう。

が、この三時間という数字は、遊びに費やす時間とほぼ同じになっています。大半の子どもが〇歳から視聴を開始し、一歳ごろには歌や体操をまねたり、画面を指して親に同意を求めたりするようになります。二歳前後になると、一人でスイッチ操作をし、家族とテレビの話題を楽しむなど「一人前の視聴者」に成長するとされています。

テレビゲーム利用も携帯用ゲームの普及などによ

り、低年齢化が進んでおり、三歳児の一・二割が使用していることがわかっています。最も多い使用時間は一時間前後で、女子よりも男子の使用が多いということです。しかし、全体で平均すると、幼児期のテレビゲーム利用は一日あたり数分～一〇分程度にすぎません。テレビに比べて個人差が大きいメ

ほすのでしょうか。これまでの知見をまとめると、質の良いテレビ番組を一定時間視聴することは、子どもの知的能力や社会性に良い影響をもたらしますが、暴力的な番組の視聴や長時間に及ぶ視聴は子どもの攻撃性や不安感情を高め、発達上の問題を引き起こす可能性があると言えます。とりわけ、最もよく研究されているのが攻撃性との関連で、暴力的な映像が攻撃行動を促進するという知見は繰り返し確証されています。特に、テレビゲームの場合は攻撃に主体的に参加すると同時に、暴力を振るうことで報酬がもたらされるといった点で、より影響が深刻だとみなされています。

では、私たちはテレビやテレビゲームとどのように向き合っていけばよいのでしょうか。はじめに、これらの良い点について考えてみましょう。映像メディアは、鮮やかな色、音声、動き、お話によって、私たちを楽しませてくれます。いろいろな知識ばかりでなく、感動体験をもたらしてくれることもあります。子どもとの会話や遊びに活かすこともできるでしょう。

また、集中力が持続しにくい子どもの注意を引くために、子ども向け番組はさまざまな工夫を凝らしています。たとえば、子ども（の声）や人形を登場させる、カットや編集により展開を速くする、音響

## 特 集

一方、問題点について考えてみましょう。最もよく挙げられるのが、視力の低下や運動不足といった身体面への影響です。心理的な面への影響としては、映像メディアが応答性や双方向性に乏しく、視覚中心の限られた経験しか生まないことが問題になります。乳幼児の身心の健全な発達には、五感をフルに使った体験や人との相互作用が欠かせません。これらの体験を通して、子どもは自分自身、他者、そして社会への手応えや信頼感を獲得していくのです。テレビやテレビゲームに触れること自体は悪くなくとも、結果としてそのような体験の機会が奪われてしまうと、子どもの発達によくない影響を与えてしまう可能性があります。

また、暴力的な映像が多いことも問題点の一つです。映像メディアは「見て、まねて、覚える」という観察学習の対象になります。三歳を過ぎるころに

は、テレビに登場するキャラクターへの同一視や模倣も盛んに見られるようになります。キャラクターになりきっている子どもの姿はほほ笑ましいものですが、幼児期は善悪の判断や現実と空想の区別がまだ充分についていません。そのため、親をはじめとする身近な大人が「媒介」する必要があるのです。「媒介」とは、子どもと一緒にテレビを見ながら、感想や意見を言い合うことを指しています。

残念ながら、子どもと一緒にテレビを見たり、話し合ったりするよりも、テレビを子守り代わりに利用している家庭も少なくないようです。そうせざるを得ないときがあるにしても、親は子どもがどのような番組に接しているかを把握しておく必要があるでしょう。そして、暴力的な映像や刺激過多な番組はなるべく避けたほうがよいでしょう。

幼児期は、食事や排泄などの基本的生活習慣を身

につける時期でもあります。メディアが生活環境の重要な一部となり、また生涯をメディアと共に過ごす時代にあつては、幼児期（それ以降もですが）の発達課題の一つに「健全なメディア習慣の育成」を加えるとよいのではないかと思われます。最初は親が時間や内容を選ぶ必要がありますが、徐々に子ども自身でメディアに接する時間や内容をコントロールできるようになるとよいと思います。

こうした習慣に加え、子ども自身に批判力や判断力がつくようになることも、これからは重要なになってくるでしょう。この力のことを「メディア・リテラシー」といいます。メディアから送り出されてくる情報をうのみにするのではなく、批判的に読み解く力、そして各メディアの特質を理解し、その特質に応じて利用する力が「メディア・リテラシー」です。現代はインターネットの時代です。いくら「有

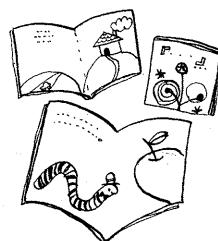
害番組」を規制したところで、親の知らない間にいちらでも情報が取り込まれてしまうのです。そのような時代にあつては、幼児期から少しづつ「メディア・リテラシー」を身につけられるよう援助していく必要があるでしょう。それには、「媒介」による、信頼できる大人の言葉が大きな役割を果たすことでしょう。

また、子育て環境全般を見直すことも必要だと思われます。各地で行われている子育て支援活動では、乳幼児を抱えている親が家庭にこもらなくてすむような環境を整えたり、子どもに生身の世界の楽しさを伝えたりする努力をしています。一人ひとりの子どもがメディアの賢い使い手になれるよう、親による働きかけはもちろんのこと、社会全体で子ども（と親）を支え、見守っていきたいものです。

（清泉女子学院大学）

# 絵本から広がる コミュニケーション

藤津 麻里



私たちの家にはテレビがありません。一年前に壊れてから、買わずに過ごしています。それまでは、大きなテレビが、子どもたちが遊ぶ部屋の一番目立つところに陣取っていました。お気に入りの子ども番組や科学番組を、小さな子どもたちがちょこんと並んで見ている後ろ姿は、なかなかかわいいものでした。

でも、見ているうちは楽しそうでも、スイッチを切るときになると騒動が始まりました。誰が消すかだけんかになる、いつ消すかだけんかになる、見終

わると疲れるのか、機嫌が悪くなりゴロゴロ寝転がる…。また、テレビを見ずにはいられなくなるのも困りました。早起きの長男は、早朝に目覚めと、まずテレビをつけて、一人でニュース番組を見るようになりました。あまり見過ぎてはいけないと、夫と私は「見ちゃダメ」と怒つたり、コードを抜いておいたりしたこともありました。そんななたのです。

テレビのない毎日に慣れてしまうと、いつたいこ

の生活のどこにテレビを見る時間があつたのか、不思議です。学校や保育所から帰つて、ちょっと遊んだらすぐ夕食、入浴、歯磨き、就寝。その合間にまた遊び、本を読み、宿題をやり、と子どもは子どもなりに大忙しなのですから。おにごっこやかくれんぼをしたり、たこを作つたりする時間を、一年前まではテレビに削られていたなんて、もつたいないことをした気がします。

現在、子どもたちにとつて最も身近なメディアは絵本です。単行本と毎月購読している月刊絵本を合わせて、四百冊くらいあるでしょうか。最近は、子どもたちが図書館や保育所で絵本を借りるようになり、新たな絵本との出会いが増えました。

毎日読んでいて感じるのは、絵本はただ作品として味わうだけでなく、家族のコミュニケーションを深める道具になつてている、ということです。

四人の子どもの中で、「読んで！」と絵本を持つてくるのは、四歳の長女だけです。小学二年生の長男と、六歳の次男は、もう自分で読むほうがおもしろいようで、絵本だけでなく図鑑や物語の本も読んでいます。一歳半の三男は、絵本は好きだけれど、持つて歩いたり、めくつて眺めたりする程度で、まだゆっくり読んでもらうところまではいきません。

長女に頼まれて絵本を読み始めると、それを見つけて三男がやつてきます。姉が母を独占しているのがおもしろくて、長女をたたいたり、絵本を奪つたりして、私のひざに乗りたがります。しまいには「おっぱい、おっぱい」。仕方なく長女は私のひざから降り、私は三男に授乳しながら読み聞かせを再開。読んでいるうちに、長男や次男が来て、絵本に見入つていたりします。三男のおむつ替えのために私が席を立ち、絵本の続きを次男に読ん

## 特 集

でもらつたこともありました。

こうして、毎日何冊も、お気に入りの絵本は何度も読んでもらううちに、長女は絵本の内容をほとんど覚えてしまって、ページをめぐりながら暗唱しています。長男は学校の「音読」の宿題で、教科書や自分の好きな本を親の前で声を出して読み、「音読カード」に親の採点とサインをもらうのですが、長女もそれをまねて「おんどくノート」を作り、時どきこの暗唱を私たちに聞かせてくれます。長男の「音読カード」の場合は「正しく読めたか」「はつきりした発音で読めたか」の二項目を、親の判断で丸や三角をつけて採点しますが、長女の「おんどくノート」にはそのほかに、父親と二人で考えたらしい「たのしく」「うれしく」「げんきよく」などの項目が並んでいます。これらについて、私たちが長女に尋ね、彼女自身の判断で丸をつけるのです。「た

のしく読めましたか?」「はい!」「かなしく読めましたか?」「ううん!」というように。

このように、親は子どもに読ませる、長女は読んでもらう、長男と次男は自分で読むなどと、いろいろな形で同じ絵本を楽しむうちに、皆が絵本のせりふや文章を覚え、口に出してみたり、お互いに言い合つたりするようになります。

たとえば、今人気がある絵本の一つが、菊池日出夫さんの「のらつこの絵本」シリーズ（福音館書店）です。長野の農村を舞台に、里山や川や野原で生き生きと遊ぶ子どもたちの生活を描いたもので、私たちには耳慣れない長野の方言がいっぱいなのも楽しく、子どもたちは細かく書き込まれた絵を眺めたり、登場人物のおしゃべりをまねたりしています。田んぼの脇を通れば、「あつ、いねかりやつてる!」「きょうは、ざつこくだあ」「ざつこくだあ」

と次男と長女が声を上げ、長男が「だっこく、だ  
ね」と訂正します。「おにじっこしらざあ!」「まで  
やい」「やだずら」と追いかけっこして笑い合いま  
す。長女が暗記しているせりふをしゃべりだと、  
次男が次のせりふを続け、長女が間違えると「そ  
こ、ちがうよ!」。しまいには、親子の普段の会話  
にまで「…ずら」という語尾がつき始めます。絵本  
のせりふが、私たちの生活の中に溶け込んでいくの  
です。

きょうだいが多いので、お互に相手が読んでい  
る本が気になる様子で、誰かが読んでいる絵本がお  
もしろそうなら、ほかの子もそれを読みたがりま  
す。小さな弟が眺めている絵本は、居合わせた兄や  
姉が声を出して読んであげたりもします。時には、  
同じ絵本を声を合わせて読むこともあります。長男  
と次男が『そうべえまつくろけのけ』(田島征彦作  
童心社)を一人で私に読み聞かせてくれたり、長男

が音読で『かわ』(加古里子作・画 福音館書店)  
を読んでいるとき、次男が絵本の中に描かれている  
鳥の鳴き声や工事の音を自分で考えて「かあ、か  
あ」「ガーッ、ドンドンドン」と効果音のように言  
い始め、鳴き声がわからない鳥は図鑑を持つてきて  
調べていたりしたこともありました。宿題のやり方  
としてはどうかと思いましたが、きょうだいで楽し  
む、にぎやかなひと時になりました。

絵本の登場人物は、子育てにも手を貸してくれま  
す。何もしたくない、着替えもしたくない子がいる  
ときは『ものぐさトミー』(ペーン・デュボア文・  
絵 松岡享子訳 岩波書店)や『けんた・うさぎ』  
(中川李枝子作 山脇百合子絵 のら書店)、新しい  
おかげに手をつけない子は『ジャムつきパンとフラ  
ンシス』(ラッセル・ホーバン作 リリアン・ホー  
バン絵 松岡享子訳 好学社)が思い出されて、  
怒つてかたくなになりそうな私も、少し肩の力を抜

## 特 集

くことができます。小さい子が食べ物を一人でたくさん取ったときは、『14ひきのさむいふゆ』（いわむらかずお作 童心社）で末っ子の「とっくん」がおまんじゅうをいっぱい取る場面を引き合いに出して、「〇〇ちゃんは『とっくん』だからしようがないよ」とほかの子に説明します。子どもには内緒ですけれど、私などは、絵本に出てくる親たちの子どもへの接し方を見て、短気な自分をこつそり反省しているんです。

店) を読んでもらった子どもたちは、その中に出てきた折り紙の重ね箱作りに夢中です。「ママにプレゼント作ってるの。中身はひみつ！」だそうです。絵本を媒介にして、多様な形でコミュニケーションが広がるのが、家族で絵本を読む醍醐味なのではないでしょうか。

絵本に登場する料理を皆で作ることもあります。『ぎょうざのひ』（かとうまふみ作 偕成社）や『ばばあちゃんのなんでもおこのみやき』（さとうわきこ作 佐々木志乃協力 福音館書店 かがくのも 二〇〇五年五月号）などを読んで、餃子やお好み焼き、クレープ、蒸しパン、太巻きを作つて食べたり、もちつきもやってみました。また、『きょうはなんのひ?』（瀬田貞一作 林明子絵 福音館書

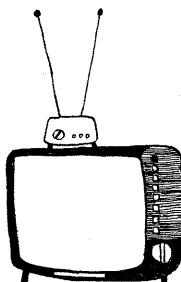
テレビを見せていたころは、その間に別の用事を済ませようと、私は子どもたちのそばを離れてしまっていました。絵本は「読まされる」ことで、親の私も否応なく絵本の世界を共有し、絵本を介したコミュニケーションに巻き込まれていきます。

子どもたちがもつと大きくなつたら、テレビが遊びわが家にやつてくる日も来るかもしれません。でも、今はまだもう少し、このままではいるつもりです。子どもに絵本を「読んで!」と言つてもらえる貴重な数年間を、これからも大切に過ごしたいと思っています。

(会津大学附属図書館)

# “考え方ながら見る”テレビ

工藤俊二



「直接体験を重視しているので、間接体験であるテレビは見せません」「家庭でテレビを長時間見ていい

るので、園でまで見せるつもりはない」…。こうい

う保育現場の声を、NHKの幼稚園・保育所向け番

組を制作している私はしばしば耳にします。事実、

私たちの番組を視聴している幼稚園・保育所は減り続けています。放送が保育に絶対必要だとは私も思いませんが、放送を保育に取り入れることに対してもある種の“誤解”があるとも感じています。本稿では、幼稚園の制作者が子どもたちに何を伝えようとしているかを述べていきます。そしてそれによつ

て“誤解”が少しでも解消されるならば幸いです。

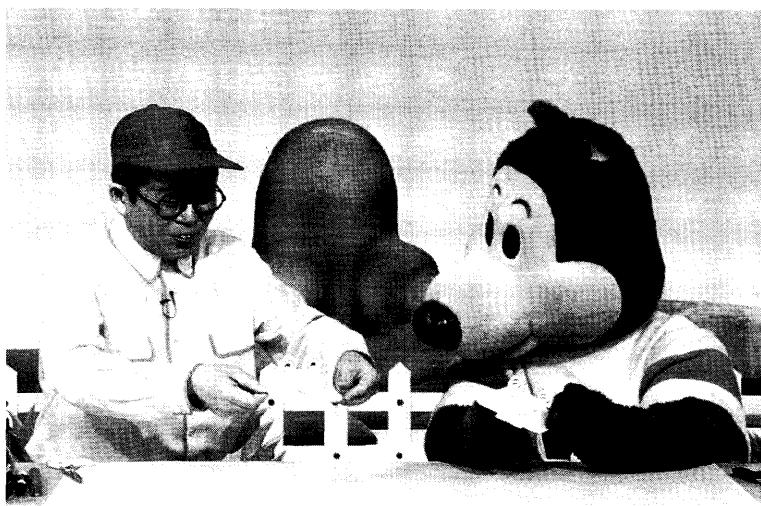
## 遊びを広げるきっかけとして

私の担当する『こどもにんぎょう劇場』『つくつてあそぼ』『しぜんとあそぼ』『わたしのきもち』『お話でてこい』といった番組は、幼稚園や保育所で保育に利用していただくことを主眼に制作しています。保育に利用するといつても幼稚園組ですから、教材である以前にエンターテインメントでなければなりません。たとえば『つくつてあそぼ』は造

## 特 集

形（表現）分野の番組ですが、この番組を教材としてとらえた場合、作り方を理解し同じものが作れるとか、はさみなどの道具が使えるようになるなど、技能や知識の習得がねらいとして挙げられます。

ですが、私たちはこの番組でそれ以上に大事にしていることがあります。それは、番組を見た子どもが自ら「作りたい！」と思ってくれることです。造形のアイデアは造形作家のヒダオサムさんが考えているのですが、私たちが打ち合わせで最初にそのアイデアを目にしたとき、「へえー」「おもしろい！」と感動するわけです。その感動をいかに番組で表現できるか制作者の腕の見せどころです。映像をどう積み重ねるか、ワクワクさんとゴロリという登場人物のやりとり（台本）をどうするかなど、さまざまな演出手法を駆使して造形の魅力を伝えようと努力します。“おもしろい”と思ってもらえて初めて、子どもの心を動かす（＝作りたい！）ことができる



▲『つくってあそぼ』より

からです。それができれば、番組としてはほぼ目的を達成したことになります。あとは放つておいても子どもが自分で動きだすでしょう。というよりも放

心が動いていないとしたら、その体験にそれほど意味があるとは言えないのではないでしようか。

### コミュニケーションのきつかけとして

送番組としてできることは実はそこまでで、その先は手出しができないというほうが正しいのですが。つまり、テレビを見ることで子どもが自分で動きだしてほしい♪遊びを広げていってほしいというのが私たちの願いの一つです。テレビが間接的な体験だととしても、それを直接的な体験に結びつけてほしいという願いです。その直接的な体験は、『つくづくそぼ』のように視聴直後に出ることもあるでしょうし、人間関係をテーマにした『わたしのきもち』だつたら一週間後か一ヶ月後か、それとも何年も後になつて出ることもあるでしょう。それにつながる『タネ』を番組に埋め込むよう、私たちは心がけています。蛇足ですが、私個人としてはテレビを見て心が動くということは、極めて直接的な体験だと思います。直接体験であつても、そこで子どもの

皆さんには職場の同僚や友人に、前夜に自分が見たテレビ番組の話をされることがあると思います。さらに、相手がその番組を見ているのと見ていないのとでは話の盛り上がり方が大きく違つてくることも経験されていませんか。裏を返せば、時間と場を共有していなくとも、番組が互いの共通体験となりコミュニケーションが生まれるというわけです。

放送教育の現場ではほとんどの場合集団視聴ですから、そこでは子どもたちは時間と場も共有しています。視聴中は番組そのものを通してコミュニケーションが生まれます。内容に触発されてある子どもが思わず発言（ため息や笑い声かもしません）し、それに引っ張られてほかの子どもが発言します。視聴後の活動では、たとえば『こどもにんぎょ

う劇場』の感想を伝え合う中で、自分が気づかな

です。

かつたことに友達が興味をもつてることを知つた  
ります。『しぜんとあそぼ』で命のはかなさに触  
れたことで、飼育している生き物をみんなで協力し  
て面倒をみていくという気持ちが生まれるかもしれない  
ません。そうやつて番組が媒介となつて一人ひとり  
の気持ちがつながっていくことも、私たちの願い  
です。

### 「テレビを見るのに頭を使いたくない」

放送教育に熱心な幼稚園・保育所では、親子視聴  
を実践されているところが数多くあります。親子で  
一緒に番組を視聴し、遊ぶ（活動する）という形で  
す。親子視聴を経験した保護者の感想は大きく二つ  
にまとめられます。一つは、幼いと思っていたわが  
子が番組の内容をよく把握し、そこからさまざま  
ことを吸収しているのに驚いたというもの。そして  
もう一つは、テレビの見方が変わったというもの  
です。

ただ、放送を使った保育実践を拝見すると、子ど

私は、本（文章）の読み解き方を学校で習いま

す。文章を読むときには頭を使うよう訓練されてきたと言ひ換えられるでしょうか。一方、テレビの見方は特に教えてくれません。これも言い換えれば、テレビを見るときは頭を使うよう訓練されてはいいということです。先述したように、放送番組は基本的にエンターテインメントですから、気楽な気持ちでのんびりと見るものだと、私も思います。『にほんごであそぼ』という番組で私が一緒に仕事をした放送作家が、あるディレクターとともに話をしていたら「世の中の人はテレビを見るときに頭を使いたくないと思つてているに違いない」という結論に至つたのだそうです。そういうきらいはあると思います。長年テレビを見てきたということは、頭を使いうように訓練されていな、いどころか、頭を使わないように習慣づけられてきたと言えるでしょうから。

もたちは実によく頭を使って考えながら番組を見ているのだと実感します。そのことに親子視聴の中で

よりよく生きるために

保護者も気づかれるゆえに、上記のような感想が出てくるのだと思います。そして自身も、頭を使ってテレビを見る有益性を認識するということなのでしょう。

最後に一つお尋ねします。皆さんには、何気なく見始めた番組に思わず引き込まれていったという経験はありませんか？

ここで言えるのは、幼稚園・保育所での放送利用が、子どもたちの中にメディアを利用するときの基本的な姿勢を育てるということ、そして同時に大人（保護者だけでなく保育者も）のメディア利用への意識も変えるということです。番組に込められたメッセージや情報を的確に読み取って、自分の興味や関心と照らし合わせて行動につなげる（もしくは、つなげない）という、メディア・リテラシーの基本がここにあります。番組を利用することで、これからの方（既に現在もそうですが）高度情報化社会に適応できる能力を育ててほしいと言いたいと思います。

ですが、的外れな話ではないでしょう。

番組がきっかけになつて、ある趣味を始めたり、ボランティアに参加したり、ひょっとしたら職業を決めるといった人生を大きく左右するようなことすらあつたかもしれません。放送番組は、人が考え方を変えたり、よりよく生きようとすることを促す可能性を秘めています。

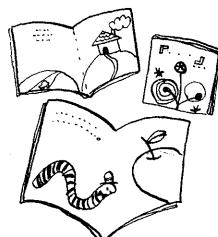
私たちは、幼児番組によって子どもが心を動かし、行動につなげ、人とかかわり、その子の人生がよりよいものになつていくことを願っています。そこにつながるように、楽しみながら頭を使って見ることで本当の魅力がわかる番組、「考えながら見る」テレビ番組を作つていきたいと思います。

（NHKエデュケーションナル）

## 絵本作りの原点

### —私のブックスタート体験—

永山 綾



私が実家に住んでいたころ、兄の家が隣だつたので、一番上の姪のNに毎週絵本を読んでいた時期があります。その楽しい時間は、Nの首が据わつた生後四か月くらいから始まり、ちょうど小学校に上がるまでの六年ほど続いたでしようか。まだ日本でブックスタート活動が始まる十年以上前の話です。

一九九二年にイギリスで生まれたブックスタート活動は、日本では二〇〇一年四月に当初十二市町村で実施し始め、二〇〇七年十一月三十日現在、実施自治体数は六三一（全国の市区町村数一八二三の約三十五%）にまで増加し、ますます活発に各地への広がりを見せてています。〇歳児健診時に、地域の人と保育者と赤ちゃんとて向き合つて声かけして手渡

される絵本たち。これは、地域を挙げての子育て支援活動の一環です。市町村合併や福祉予算の削減が進む中、この活動が活発化したのは、今まで考えられていた以上に、絵本が月齢の低い子どもと大人との間によい関係を生み、また、その様子を見守る人たちにも驚きと共感を呼んだからであると思います。絵本を編集する仕事をしている私も、保育の場に絵本の役割があることを身をもつて経験したことが、現在の本作りの原点になつていて、それを忘れずにいたいと思っています。

その体験をした、Nの話に戻りますが、Nが生まれたのは、暑い夏の日でした。Nは、私の父母にとつても初孫であり、また兄夫婦にとつても、待望

の赤ん坊でした。Nを兄夫婦の家に迎えてからは、大騒ぎの日々が始まりました。何をしても「初めて」尽くし。泣いても笑っても、おしつこをして、うんちをしても、とにかくすべてが事件でした。眠っているのを眺めるだけでも安らかな幸せを与える存在に、私も単なる血のつながりだけでない、不思議な親近感を覚えました。

そこで私もおむつ替えを手伝い、証拠写真も撮り、大きくなつたら「私もおむつをちゃんと取り替えたのよ」と、Nに話そと企んだりしました。ただそれだけでは、本人はまず覚えていないでしょう。私も同じようなことを大人になつてから叔母たちに言われるたびに、何だか恥ずかしかつただけで、叔母たちへの感謝の気持ちや親近感にはつながらなかつたようだと気づいていました。

そこで、私のNへの愛情表現、私とNとの関係で後々本人も覚えてくれていそうなことは何かと考えて、思いついたのが「絵本」でした。それは、Nと

父母亲や祖父母との間で否が応でも築かれる関係の次に、叔母としての自分を意識して覚えていてほしいという、私からの勝手な願いからでした。また正直、この最初の身近な赤ん坊に、どんな言葉かけをしてよいものやらと思い悩んでいたのも確かで、そこに絵本があれば自然と言葉が出てくるのでは…と思つたのも一つです。

たまたま私は幼いころから本が好きで、成人しても兄弟共有の絵本もほとんど私が大事に保管し、さらに、社会人になつて絵本を企画し販売する仕事にも就いていたので、私の部屋は本だらけでした。Nが生まれる前の年に、インドネシアのバリ島で子育てを経験した人が描いた絵本を出版する機会があり、部屋の本棚にはその絵本のシリーズも並んでいました。何でも口に持つていくNには、まずはかじつても大丈夫な、合紙絵本がよいだらうという軽い気持ちで、私は本棚からそれを取り出し、週末ごとに、首が据わり始めたNに見せました。その絵本は柔ら

## 特 集

かな色合いの水彩や、はつきりとした色彩の切り絵風タッチで描かれていて、ほとんど言葉がなく、書いてあってもオノマトペ（擬音語・擬態語）のようなものだけでした。最初のころは抱っこしてこの絵本を開くと、手を伸ばしてつかもうとし、つかむと口に持つていくだけの繰り返しでした。

そのうちに、「ぞうさんがママと一緒にいるね」などと話しかけると、開いた頁の絵をじいつと見つめるようになりました。やがて「何だか楽しそうだね、踊ってるね。踊ってみようか、パツティパ、パツティパ！」と、Nを乗せている私のひざを上下に振動させると、うれしそうに笑うようになります。私は調子に乗つて絵本を投げ出して、その絵本の場面で描かれているように「パツティパ、パツティパ！」と口で繰り返しながら、同時に手をたたきました。すると、Nは声を出して笑いだしたのです。「こんなシンプルなのに、こんなに喜んでくれるなんて！」。それはそれは楽しい発見でした。

Nは、このシリーズの中で、特に『リズム』（真砂秀朗作 三起商行）が気に入ったようです。六か月過ぎには、「パツティパ、パツティパ！」と読むと、お座りして両手を握つて振りながら、自分でお尻を上下させてリズムをとり、やがて、私のまねをして自分でパチパチ手をたたいて、にこにこ笑うことを繰り返すようになりました。七か月過ぎたあたりから、私がNの家に行くと（そのころには、この絵本は兄の家の本棚に移っていました）、私の顔を見た途端に、本棚まではいいとしてその絵本を抜いて、私にハイっと言うように突き出し、「読んで！」とばかりに促すようになったのです。そして、その楽しい時間は、もちろんこの絵本にとどまりませんでした。

その絵本との楽しい時間はさらに数か月続き、やがて一歳過ぎたころからは少しストーリー展開が入った絵本にも興味を示すようになり、絵本も、一冊ではなく、三冊くらい読まないと満足しなくなつて

いきました。やがて毎週の定期的な『読み聞かせタイム』となつていったNとの時間でしたが、しばら  
くは、まずその「ほとんど言葉のない絵本」が導入としてあつて、それからほかの絵本に移る、といつたことが繰り返されました。

毎週土曜日の朝六時くらいになると、隣の家との間の戸の鍵をガチャガチャ開ける音で私は眼を覚ました。そして、私の寝ている部屋のドアがあつたいう間に開かれ、ドシドシ音を立ててNが入ります。本棚の扉がおもむろに開かれ、彼女はとつかえひつかえ絵本を抜いては戻しを繰り返し、その朝読んでほしい絵本を三冊選びます。そして、一人でトントントントンと音を立てて階段を登り、二階のリビングのソファにちょこんと座り、私が起きてくるのを待っています。間もなく私が眠い眼をこすりながらリビングに行くと、『週末読み聞かせタイム』の始まりです。やがて三歳違いの弟が生まれ、そ

甥のRも一歳くらいになると、そのひと時に合流するようになりました。

二人の絵本の好みは違いましたが、たいてい、各一冊は一ヶ月から三ヶ月くらい変わらず毎週土曜、日曜と楽しみました。三冊目は私が新しいものを選んで読むか、もしくは二人のうちのどちらかが新しいものを選び出していました。二人は本棚の背や表紙を見ただけで選ぶので、たいてい最後の一冊はくるくる変わり、どちらかのお気に入りになるのはまでした。それでも、もちろん二人が大満足し、その日何度も『読んで!』とせがんだものは、次の週にすぐにお気に入りになるものもありました。

この経験から、私は幾つもの学びました。一つには、本当に子どもにとつて絵本はそんなに多くなくていい、でも、お気に入りの絵本は、読んでみないとわからないし、その出会いのきっかけづくりは、やはり大人の手と眼がある程度必要だという

## 特 集

ことです。絵本を開くと、めくるめく世界が広がつていて、それを子どもと共有することがこんなに楽しいなんて！ そんな頁をめくる体験は、まさに大人的手の介在があつてこそでしよう。その部分が、ほかのメディアと違うところだと思います。

そしてそれは同時に、そのきつかけをつくる大人と子どもとの関係の構築と継続にもつながるのだと思いました。たまたま私の部屋の本棚が身近にあつたNやRの場合は、そこの扉がいつでも開かれていて、その扉を開くこと、つまり、叔母である私の心の扉も同時に常にたき続けたことが、絵本との時間、そして私との関係の継続につながつたのだとも思います。

何よりも個人的に得た最良のご褒美は、この「週末読み聞かせタイム」を共有することで、NとRと私の個人的な関係ができたことです。大人にもこんな思いも寄らぬプレゼントをもたらしてくれる普遍性のある絵本を、一点一点大事にしていきたいと思います。

また、最初にNが気に入つて私も楽しんだ『リズム』などの新しい絵本から、私が兄弟と共に母に読み聞かせてもらつた、出版されて二十五年以上たつている破れかけの絵本まで、NもRも、新旧問わず

絵本を楽しんでいたことに気づきました。そしてその新旧の絵本の共通点は、普遍性をもつた絵本だつたということです。子どもを取り巻く環境の変化については常に叫ばれていますが、四半世紀以上の時間を生き抜いてきた絵本（市場に生き残つている場合、これらの本を“ロシングセラー”と呼びます）は、それでも色あせることなく、違う時代を生きてきた三世代以上の大人と子どもの心をときめかせ、震わせ、共感させる力をもつています。実際、児童書の売上げの九〇%近くがこのような既刊本であるそうです。

# 保育の場で 共に育つ「場」を支える「対話」

高嶋景子

これまで私は、子どもたちがさまざまな他者やモノや出来事と出会いながら、少しづつ自分なりのかかわり方を見つけ、そのかかわる世界を広げていく過程に関心をもち研究を進めてきました。現在も、そうした子どもたちの育ちの過程に自分自身が出会いながら、それぞれの子どもがたどつていく多様な道筋やそれを支えている背景について考えたいと思い、幼稚園や保育所などの保育の場へ通っています。

そうした保育の場で、子どもの育ちのプロセスを追っているうちに、次のようなことに気づかされました。それは、ある一人の子どもが「変わってきた」「育った」と感じられるのは、決してその子ども

が「情緒的に安定したから」とか、「何らかの人とかわる『術』を習得したから」といったような、その子だけの個人的な変化ではないということです。それらは、その子を取り巻く周囲のさまざまな子どもたちとの関係の変容や、そこにかかる保育者の変容などと密接に関連し合いながら生まれているように見受けられます。また、その保育者の変容も、同様に、その周囲を取り囲んでいる身近な他者との関係と深くかかわっていることが少しづつ見えてきました。

しかし同時に、必ずしも、そうした関係の変化が常に起こり得るとは限らないということにも気づかされます。時として、そこに存在する人々の関係が固定化

してしまい、何らかの問題を抱えたまま状況が硬直してしまった場合もあるようです。では、そのような違いはどうして起こつてくるのでしょうか。また、それぞれの子どもや保育者の変容の起こりやすい「場」には、いったいどのような関係が築かれているのでしょうか。そうした関心が現在の私の研究の出発点となっています。

### T君との出会い

昨年度、幼稚園を卒園したT君とは、彼が三年保育の年少クラスに入園してきた四年前に出会いました。入園当初、登園時になかなかお母さんから離れられないような一面もありましたが、好奇心旺盛で活動的な彼は、園全体を走り回つて魅力的な遊びを見つけては自らかわっていく姿が見られていました。

戦いごっこなども大好きなT君は、入園当初は、互いに相手の状況を読み取れず、加減ができずに本気で

戦つてしまつたためにトラブルが起こつたり、遊びが途中で破綻してしまつこともあります。しかし、そうした葛藤の繰り返しの中で、T君なりに遊びが破綻しないようなイメージの出し方を学んだり、友達とのかかり方を探つていつている姿が徐々に見られるようになつていきました。また、それに伴い、クラスの子どもたちもT君の始める遊びの発想をおもしろがつたり、そこに引き込まれて一緒に遊ぶ姿が見られるようになつていつたのです。

年中クラスに進級すると、T君はそれまでとはまったく違つた姿を見せるようになります。

### かかわりの手がかりが生まれにくい場

年中に進級したT君のクラスでは、T君のように年少クラスから進級してきた子どもたちのほかに、多くの子どもが二年保育で新たに入園してきました。そのため、特に四月当初は、クラスの子どもたちの大半が

新しい環境の中、保育者があらかじめその日の活動を想定して設定した製作コーナーや、おままごとコーナーなど比較的共通のイメージがもちやすい場で、少しずつ同じ遊びを共有しながら、新しい仲間との出会いを経験していく様子が見られました。

それは、まだかかわりの浅いこの時期に、子どもたち同士が、共有しやすい文脈の中で、互いの関係を維持したり、形作ろうとしたりしている姿のようにも見受けられました。しかし一方で、そうした遊びの状況は、共有されている文脈からの逸脱やそれらのイメージの発信が興味をもつて受け止められたり、それをおもしろがつて新しい遊びに広げたりしていくような展開が生まれにくいという側面も併せもつていたようです。

そのような中、T君はたくさんの子どもたちが集う製作コーナーでクラスの「こいのぼりづくり」などにも参加するのですが、周囲の様子に目を向けながらも

一人黙々と作業を進め、自分から

他児とかかわろうとする様子は見せません。途中、こいのぼりとは関係ないもの（ゴルフクラブの形をした折り紙）を作つて、それを

振つてみたりする（素振りのようなスイングをする）など、共有されている文脈とは異なるイメージや見立てを発信している姿は見られます。しかし、それを共有して新たな遊びとして展開してくれる「受け手」が現れないためか、T君にもそれ以上の発信は見られず、その後、一人で保育室を出ると園内をブラブラと歩き回るというような姿が見られました。

そうした状況が新年度当初はしばらく続き、気がつくと、以前のように積極的におもしろそうな遊びにかわつていったり、活動的に走り回つたりする姿はすっかり影を潜めてしまいました。そして、クラスにおける遊びやかかわりに対し、かかわるきっかけや



道筋を見つけづらくなっている様子が見受けられるようになつていつたのです。

### もう一つの保育の場で生まれてきたかわり

そんなT君が少しづつT君らしい（と感じられるような）姿を見せてくれるようになつてきたのは、クラスではなく「預かり保育」においてでした。

正規の保育時間に比べて少人数のゆつたりとした放課後の雰囲気の場の中で、いつも一緒にそこに参加するM君たち特定の他児との間や、自分を慕い、自分の後をついて歩いてくれるようになった年少児のL君との間に、しだいに親密なかかわりが生まれてきました。

それらのかかわりは、T君にとって、遊びの中で自分なりのイメージや見立てを発信したときに、それを受けて反応を返してくれる他者がいるという安心感のある「居場所」となつていったようでした。そんな彼

らとのかかわりの中では自らの見立て（特定の場を基地に見立てたり、架空の敵を生み出したり）を積極的に声に出して発信したり、それをもとにしたごっこ遊びを楽しそうに共有している姿が見られるようになつていきました。また、これらの親密な関係がよりどころとなり、「預かり保育」の中で、ほかのさまざまな子どもたちが共に遊ぶ場においても、T君が自分なりのイメージや見立てを発信し、それを周囲の子どもたちと共有し合いながら遊ぶ姿が見られるようになつてきました。

こうして「預かり保育」の中で生まれたM君たちとの関係は、T君にとって、昼間、自分のクラスで過ごす時間においても、時折ホッとできる拠点（M君は同じ年長でもほかのクラスの子でしたので、いつもT君と一緒に遊ぶというわけではありませんでしたが）となつていった様子も見られました。しかし、それでもクラスにおけるT君自身の様子はあまり変わりません

でした。相変わらず、クラスや園内をブラブラと歩き回つたりすることも多く、なかなかじっくり遊び込む相手や遊びが見つからない状況が続いていました。そして、その背景となっていたクラスのほかの子どもたちのかかわりへも目を向けてみると、実は、このころ、T君以外の子どもたちにも、あまり遊びが持続したり発展したりする様子が見られず、担任のN先生もそれが気になつてているようでした。

#### N先生の変容を支えた共感的かかわりと資源

このとき、T君の担任だったN先生は、その年の春に他園から転任してきたばかりの新任の先生でした。前任園では三年間の保育経験があつたのですが、それまでとはまったく異なる保育の方針や形態に最初はかなり戸惑われたようです。

T君の幼稚園では、朝登園してからの一日の大半を、子どもたちがおのおのに好きな遊びに取り組みな

がら過ごしており、そこでそれぞれの活動を展開し、かかわりを深めていく過程を保育者が丁寧に読み取りながら必要な環境構成や援助をしていくことを大切にしていました。N先生自身は、そうした保育をしたいという思いをもつて、自ら希望して転任してきたのですが、実際に保育が始まつてみると、おのおのが好きな遊びをしている子どもたちに対してもかわつていいのかがわからず、悩んでしまつたと語っています。「遊びを援助する」という言葉はよく聞いていても、具体的に目の前で展開している子どもたちの遊びをどのように援助し、どのようにかかわつていけばいいのかがなかなか見えてこず、それでも毎日子どもたちにかかわつていかなくてはならない状況が本当につらかったそうです。

ただし、N先生がそうした悩みを園内で打ち明けられるようになったのは、一学期も半ばをだいぶ過ぎたころでした。それまで、N先生は、その「わからな

さ」を一人で抱えていて、園内の誰にも打ち明けられなかつたのです。そんなN先生がその苦しさを語れるようになつていつたきづかけは、ある日の保育後小さな出来事でした。あるアクシデントをきづかけに、小さなことでも物事を「共に」受け止め「共に」考えてくれる同僚（主任とフリーの保育者）がいることに気づきました。それによつて、N先生は初めてそのとき抱えていた自分の悩みを打ち明けることができたそうです。

打ち明けられた主任とフリーの先生はN先生よりも経験年数も多く、その園でもベテランの保育者でしたが、決して何らかの「答え」や一方的なアドバイスをN先生に提供するようなことはしませんでした。ただ、N先生のクラスのそのときの子どもたちの姿を丁寧に追いながら、どんなことを楽しんでいる様子が見られたか、どんな子どもたちのかかわりが生まれているか、それぞれが発見したことをN先生に伝え、語り

合いました。それらを通して、N先生自身が自分のかわりを振り返り、これから援助について考えいくプロセスに寄り添つていつたのです。

一人で悩んでいた当初、N先生は、その園で求められる（と思っていた）保育がわからないという点に悩み苦しんでいました。しかし、N先生の「わからない」とことを、保育していく上での正統な悩みとして共有し、共に考へていこうとする先生方の共感的なかかわりを通して、N先生は、そうした「あるべき保育」とされるようなものが存在しないということに気づいていました。そして、目の前の子どもの姿からその子の思いを読み取りながら、その都度、必要な援助を考え探つていく対話的なプロセス（＝子どもの姿との対話）そのものが、その園の実践であるということにも少しづつ気づいていつたようでした。また、実際に、ほかの保育者との対話を通して、具体的な気に入る子どもの姿を基に語り合い考へていった経験は、N

先生自身の「省察（＝自己内対話）」を広げていくことにもつながっていきました。

さらに、こうしたN先生の自己内対話を生み出す資源の一つとして、T君の姿をとらえたビデオも活用されていきました。クラスでのT君の姿だけでなく、「預かり保育」における子どもたちの様子を記録したビデオを通して、N先生は、自分がいつも保育中に見ている姿とは異なるT君の姿や、そこで展開されている子どもたちの遊びの様子に出会い、その違いにとても驚いたようでした。

たとえば、ある日の預かり保育では、十人以上の子どもたちが参加して、水路づくりというダイナミックな遊びを開いていました。それぞれの楽しみ方やイメージは少しずつ異なっているのですが、そのズレも遊びを発展させていく材料として互いに活用しながら、一つの「場」を共有し、一時間近くもの時間をかけてじっくり遊び込んでいました。そんな場面をビデ

オで見たとき、N先生は、そのころ自分のクラスで見られていた子どもたちの「遊び」の様子と、そこで見られる「遊び」の違いに驚き、その違いを生んでいるものについて、自分なりに考えようとする姿勢が見られ始めました。

その結果、二学期に入つたころから、少しづつN先生のクラスの保育室の環境が変わり始めました。どのような環境があれば子どもたちの遊びが生まれたり、持続したり、展開しやすいのか、N先生が自分なりに考えたり、同僚保育者と相談しながら日々工夫していく様子が伝わってきました（さらに、その遊びを「共に」おもしろがつたり、そこへ参加しそびれている子を巻き込みながら「共に」参加していくたりするN先生の子どもたちへの共感的なかかわりも一学期に比べ、よりいつそう増えていきました）。それに伴い、



しだいにクラスの子どもたちの遊びにも変化が生まれてきました。

それぞれの子どもが、そうした環境に対し、自分なりの見立てやイメージを付与しながら遊びを展開し始め、互いのイメージを基にさらに遊びの文脈を広げていくような活動が見られるようになつてきました。そのようなクラスの変化に伴い、T君もしだいに自分なりのイメージをそこで発信し、いろいろなかかわりを探り始めていくようになつていつたのです。

### まとめ

T君の変化やN先生の変化は、何らかの既存の枠組み（価値観）から「あるべき像（あるべき子ども像・あるべき保育者像）」を迫るような一方的なかかわりを通して生まれたものではありませんでした。彼らの周囲の人々との間に築かれたより親密な関係（「共に」世界を見て、「共に」参加していく）とする「同伴

者」のような共感的な他者との関係）の中から生み出されたものであつたように思われます。

子どもにとつても、保育者にとつても、そして私のような観察者にとつても、ありのままの自分を受け止めてくれる共感的な他者の存在や、そうした他者とのかかわりの「場」が存在することは、自分の思いや気づきを発信していくために欠かせない基盤となります。そして、そうしたかかわりの中でこそ対話的関係というものは生まれてくるのだと改めて感じさせられました。

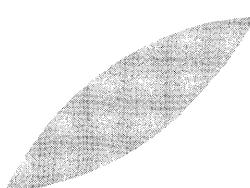
その場に携わる人それぞれに多様な気づきや育ちを生み出すような「対話」が、どのような「場」にどのようになりますのか、また、その「対話」がどのようになるかについて、自分自身の学びや変容のプロセスと併せて、今後、さらに丁寧に分析を進め、考えて行きたいと思っています。

（田園調布学園大学）

## 子どもと保育の情景 (16)

# 新たな子どもたちとの出会いの季節に

戸田雅美



四月は、新たな子どもたちとの出会いの月である。

私は大学を卒業して初めての四月、幼稚園の担任として、四歳児、四十人の新入園児を迎えた。それまでの実習では、三十人以下のクラスばかりを見てきていたので、男の子が二十三人と女の子が十七人の子どもたちは、大変だろうと予想はしていたものの、実際にそろつてみた人数の多さに、まずは圧倒された。

ところが、中には、泣いて母親と離れられない子どももいる。その泣き声を聞くと、私もまた、私の手を握ってくる子どもの手を必死で握り締めていた。もちろんこのような事態は予想をしていたものの、無理に母親から離れた上に、新人で決して保育が上手とはい

入園式は何とか終わり、翌日から、その子どもたちを保育室に迎えた。前日に、主任の先生のアドバイス

えない私のクラスになってしまった子どもが気の毒に思えた。今になって考えてみれば、保育をする私自身が不安だったからに違いない。さらに、四、五人の子どもが泣き、私の手だけでは足りず、園内のほかの先生の手も次々とふさがつていつた。

私の初めての保育の四月は、こんな情景だった。

その後、泣く子どもは、日に日に少なくなつていったが、最後まで、毎朝泣いて私と手をつないでいたのは、三月生まれで身体も一番小さいさとこちゃんだつた。私が心配していると、ある日、主任の先生が、「大丈夫。こんなふうに泣いて主張できる子は、納得すれば、しっかりとするから。それよりも、今頑張つて、後で泣く子もいるからね。案外、そういう子どもほうが難しいこともあるのよ」と教えてくださつた。私は、恥ずかしいことに、そのとき初めて「幼い子どもにとつては、『泣く』ということは自己主張なのだ」という極めて当たり前のことだが、すとんと胸に

落ちた。

主任の先生が予想したように、さとこちゃんは、泣きやんでもみると、意志のはつきりした子どもであることがわかつてきた。一日が終わつて帰るときには、クラスの女の子たちに一番人気のあつたこうじ君と、誰よりも手をつなぎたがつた。私が「さとこちゃん、今日は違う人と…」と言つても、「三人でつなぐ！」と言つて、毎日ちゃんとこうじ君の一方の手を確保して、にこにこと保育室を出て行くのだった。また、四歳児にとつては、一人で縄跳びを跳ぶことは容易なことではなかつたのだが、仲良しのかなこちゃんがとても上手に跳べるのを見ると、小さな身体で毎日一所懸命練習をし、とうとう跳べるようになつてしまつた。

主任の先生の予言が、もう一つ的中していることがわかつたのは、もうすぐ六月になるころのことだつた。それまで一度も泣いたことがなく、しっかりとしている印象だったのももかちゃんが、登園拒否を始めたの

だつた。みんなは幼稚園が楽しくなつて、好きな遊びを始めているというのに、ももかちゃんは、たつた一人、毎朝「幼稚園なんて来たくない!!」と抵抗し、母親と私を驚かせた。その上、ももかちゃんは、さとこちやんのようにしくしく泣くのではなく、私と手をつなごうともせず、断固として家に帰りたがつた。

園長先生は、私がほかの子どもたちの保育だけでも四苦八苦しているのを見て、それでは困るだろうと、ある日、ももかちゃんを園長室に連れて行つてくださつた。ところが、ももかちゃんは、いつそう怒りだし、「ばかばか幼稚園のばかばか先生!」と言つて、

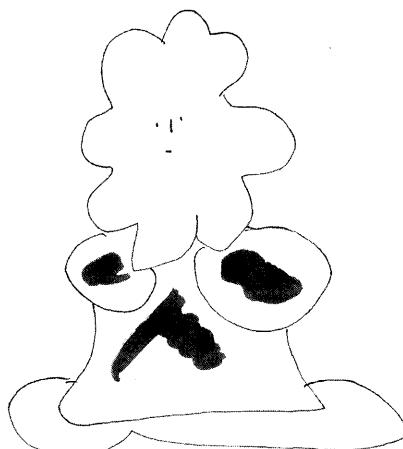
園長室にあるものを、次々と窓から外へ投げたのだそ  
うだ。園長先生は、その日の保育が終わつてから、お  
もしろそうに笑つて私に報告してくださつた。

それから、私は、ももかちゃんと少しでも関係ができるようになると、ももかちゃんの自宅に遊びに行つたり、機会をとらえて、一緒に動くようにした。何とか

ももかちゃんに私を信頼してもらいたいと一所懸命  
だつた。

その後も、ももかちゃんは、プールや避難訓練など、何か新しいことがあるたびに必ずと言つていよいよ「やらない!」と抵抗した。けれども、未熟な担任であつた私のことは好きになつてくれたらしく、私が一所懸命に話をするとき、何とか自分の気持ちに折り合  
いをつけてくれるようになつた。

MAORE



最初のころの保育は、私にとつて何もかもが驚きと発見の連続で…、と言えば格好がよいが、まるで見通しのきかない霧の中を手探りで歩き回っているようなものだつたと思う。

昨年の秋、このクラスの保護者たちと、本当に久しぶりに会う機会があつた。

さとこちゃんは看護師になつていた。彼女が、看護学校の学生だつたときに、母親が大きな病気をしたといふ。そのときは、看護師の卵として、献身的に看護をしたらしい。さとこちゃんの母親は、にこにこと安心した笑顔で、そのときのさとこちゃんの活躍ぶりを話してくださつた。その会には、母親と一緒にさとこちゃん本人もやつてきていた。驚いたことに、さとこ

…」との共通の思い出話に花が咲いた。  
ももかちゃんとは、ずっと年賀状のやりとりをしていたので、彼女が国際線のスチュワーデスになつたことを、私はすでに知つていた。ももかちゃんの母親は「ばかばか幼稚園のばかばか先生！」なんて園長室から物を投げた子ども、ほかにいませんよねえ。私もあのときは、もうどうしようと思つて。でも、そんな子どもが、今は世界の空を飛び回つているなんて。どんな子どもでも心配ないつて、そんな見本になつちゃいますよね」と、笑いながら話してくれた。

こんな具合に、私は四十人の子どもたちとたくさん物語を紡ぐことができた。この連載で描いている子どもと保育の情景は、ほんの短い時間の物語である。その物語には、もつともつと長い時間の軸がある。四月、新たな子どもとの出会いの季節。保育の一つひとつの場合の連なりの先に思いをはせる季節もある。人気があつて…」と楽しそうに話し、私も「そ、そ、そ

上海↔東京

## 子育てメール便 (2)

橋本雅子  
津守多実

まさことたみは東京の養護学校での仕事を通じて知りあった子育て仲間。まさこの子ども愛佳は三歳女兒。たみの子どもクナは五歳男児。まさこ一家が夫、申屠（スンドウ）の出身地である中国上海に転居し、上海の暮らしがスタートして数週間がたちました。

### 来客時の様子

まさこ」 今日は引越し後半の荷物が船便で届き、愛佳の遊び場は広げた荷物でしつちやかめっちゃか。愛佳はなじんだ品々の中でもしろ落ち着いて遊んでいます。

さういふ今日は来客、朝から家中の大掃除。何しろお客様は家中見

て回るので大変です。しかも、どうやら宿泊されるよう、申屠も今朝まで予定を知らず。とはいへ顔見知りの人、私も戸惑う気持ちを切り替え、日々を楽しむ愛佳の柔軟性を見習いたいと思いつつ…。 昨夜は突然、二組の娘と父、どちらも娘さんが大学一年生、日本語勉強中。時どき、日本語と中国語を教え合うことになりました。この突然の来客というパターンが多く、親しさの表現なのかもしれません。

たみ 愛佳ちゃんが安心していらる空間が整いつつあり、生活リズムができ、少しずつ生活が広がってゆく様子、興味深く読みま

した。それにしても、何で来客の多い家庭なんでしょうね。ウエルカムな家庭のよさと大変さが感じられます。そういうえば、東京にいたときも、しょっちゅう友達が泊まりがけで来てましたよね。気張つたもてなしではなく、雑魚寝だつたり子どもが泣いていたりした気楽な集まりがもてたことは、突然の来客を好ましいことと感じられる中層の人柄が大きかったのかもしれません。来客大好きなウチの夫でも突然の泊まりは嫌がりそうです。今でも子ども連れの家族が来ることもありますか？

まさ」 先日とは別の来客時様子です。九月から小学入学の女兒

と両親、祖母の四人。中層の幼なじみの「いとこ」で、私たちの結婚式もアレンジしてくれた親しい親せきです。言葉のわからない私に、あれこれと気を配ってくれた温かい思い出があります。その娘も来ると、「いとこ」として、愛佳も楽しみにしていました。

約束の時間に一時間遅れて正午近くの来訪。

定例どおり、家を案内し、最後に最上階の私たちの部屋を見せました。愛佳のおもちゃコーナーで、子ども二人の足は止まります。ところが、一緒に遊ぼうと愛佳が用意するもの、手にするもの、いとこの娘はすべて取り上げ

て一人で遊びだすのです。愛佳は手を引っ込めて暗い顔。そばに立つ「いとこ」は中層と話しているものの、状況が見えていないようです。私は片言の中國語と身ぶりで、独り占めした畳などのまま」と道具やレールを一人で遊べるように提案してみるのですが、大人の私には見せるように、愛佳には隠すように遊ぶので、間を取りもつになかなか苦労しました。

「いとこ」は、言葉が使えないもどかしさを一番に感じます。相手の子ども、「こちらが二人とも言葉がつたない」とことで、困惑っていたのでしょうか。お腹もあったことをじょう。そんなときには、ただ

でさえ難しい、初めての出来事の場に、ものがたくさんある空間を設定したのも、誤りだったかなとも反省。

そんな一人も外食中にジュースを乾杯したりするうちに、言葉を介さない笑顔をかわす楽しさが生まれてきました。帰り道、手をつないだり、かけっこしたり、ようやく親しくなり始めたところで、帰宅後すぐに英語の演劇レッスンに行きました。

たみ　うーん…。子どもたちとのことで起こったこと。このやりとりだけではわからないことも多いのですが、小学校に上がる年齢の子とすると、対人関係がとても幼

い感じがします。また、親の対応も日本とはかなり違います。日本では小さい子のおもちゃを取ると

いうことはタブーで、「かして、ありがとう」というやりとりが子どもにも親にも染みついていて、うそっぽいほどだったことを思い出しませんか。

まさひ　やりとりの幼い印象は、自宅で自分のおもちゃを守る一歳の子のようで、譲った愛佳が年長者に感じられるほどでした。愛佳が泣いたり怒ったりすれば、親も予も、反応はまた違ったのかもしれません。自然発生的な遊びの中

思います。イレギュラーな」とへの戸惑いの様子から、何となくですが。

後で申屠いわく、「こと」は子どもが遊んでいる、というふうにとらえているだけで、その中で子ども同士に何が起つていて細かくは観察していないと思う」とのこと。普段は延長保育、祖母が育児をして、親子で唯一ゆっくり過ごせる週末はおかげここと事。自分の子が子ども同士で遊ぶ様子を見慣れていないこともありますのかもしれません。

子どもに望むもの

以前公園で、一歳くらいの子ども

もが棒切れを愛佳にぶつけても、一緒にいる大人（多分祖母）がこちらに謝る様子がなかつた」とあります。一概には言えないものの、私が感じる違和感は、大人が子どもに伝えようとする対人関係のマナーの違いなのかも知れません。日本では一人っ子で育つことも多様性の中にあるけれど、こちらでは皆が一人っ子の難しさとも感じます。大人が何を伝えるか、幼稚園などの集団の場で譲つたり、相手を思うような場面をどういう大人が一緒に考えているのだろう、と考えてしまいました。たみ おけいこ事が多く、多岐にわたっていることは上海と東京の

状況はよく似ているようです。こちら東京でもさまざまなおけいこ事が盛んです。「遊びながら」というフレーズがつくものも多いのがこちらの特徴かしら。遊びながらだから子どもは楽しんでいるし、お勉強や何かが身につく、遊びにも目的があるて、他人に任せることという外注傾向を感じます。

私の周りでは、幼稚園の先生やさまざまな情報から「遊びは重要」ということが浸透していますが、子どもの「よく普通のカタチにならない遊びは軽視する傾向」が多く、愛佳と一人では比較的今は、ほほ笑んで見守られることまさ!」こちらの幼児へのまなざしは、ほほ笑んで見守られることがあります。ただ、どういふ子どもになつてほしいのか、田指すところが、日本とは違うように感じることがあります。小公園で愛佳がする遊びをまねて、祖父に激しくしかられる男の幼児

子ども同士の遊びでも親が一緒に遊ぶことはあまりなく、トラブルになつたときだけ親が登場します。ちょっととした大人のかかわりや見守るまなざしがあると、うんと落ち着いて遊べるのに…と、残念に感じることが多々あります。

まさ!」こちらの幼児へのまなざしは、ほほ笑んで見守られることが多い、愛佳と一人では比較的今は、ほほ笑んで見守られることがあります。ただ、どういふ子どもになつてほしいのか、田指すところが、日本とは違うように感じることがあります。小公園で愛佳がする遊びをまねて、祖父に激しくしかられる男の幼児

言葉がよくです。公園や園後の

あり、祖父母に苦情がいつてはいけないと心配になり、相談するほどでした。「たくましく育つてほしい」って感覺、こちらの幼児から小学低学年に求めるところは、あまりないよう思います。

たみ 日本のほうが身体感覺を発達させることを重要視しているのかもしれませんね。規制の言葉が多い反面、「男の子はこのぐらいたくましくしないとね」という、身体的にも精神的にもたくましくあつてほしいという価値觀があるのも確かです。

ただ、しかられるような遊びつて、愛佳ちゃんはいたつて穏やかに遊ぶ印象があります。ルールや遊具の使用方法をはみ出す遊びといふことですか？ 愛佳ちゃんとクナが遊ぶときは遊具を使うことはあまりなく、葉っぱを集めたり、低い杭などに足をかけてみたり、水たまりをいじったり、そんな感じでしたよね。

まさこ 水のない池の縁や岩を私と手をつけないで歩くようなことですが、今思うと、孫のけがを恐れたくましくしないとね」という、（ワンピー）とかいう言葉があり、遊びが好きな子どもを見下げる意味合いもあるようです。親の言ひことをよくきく、外では遊ばなくてよい、という価値觀もあ

り、このあたりの幼児期の育児は、ご存じのように、祖父母がメイン、またはベビーシッターで、親が長時間直接かかわるのは仕事のない休日だけに限られるようです。その日も

幼稚園のようですが、毎朝泣きながら連れて行かれています。祖父が言うには、「わがままに育てられているから」とのことですが、外遊びする様子もまだほとんど見ません。

愛佳と散歩した小型犬を飼っている家には、一歳上の男の子がいるようです。でも、犬と一緒に散歩している様子は見たことがありません。教育熱心な両親が選んだ幼

るので、まだよくわかりませんが。

おけいこ事に朝早くから出かける様子を見かけます。私も「あなた娘ですか？」と聞かれる場面があるくらい、親子が平日、共にいる」とが異色のようです。それくらしあい共働きが常識といったところ。母親も出張残業が当たり前に受け止められ、子どもは夜九時まで託児もあつたり、全寮制幼稚園もそんな社会状況によるものでしょりや。

小公園で同じ年ぐらの子ども遊んでいますが見向きもせず、年上の集団を追いかけるなんて、私が見ると、氣後れせず、勇敢だなあ！

でも走り回る子ども集団の魅力は、そんなことを乗り越えさせる何かがあるんでしょうね。ほとんど相手にはしてもうれないのですが、田舎っぽい走って追いかける気になる子どもたちのそばにつかず離れず、達成感。気持ちよ一回を終えることができました。

そしてこの女の子に付き添つていた母親が心をくだいてくれ、

（）十人弱の子ども集団の後を一人追いかけていました。

小公園で同じ年ぐらの子ども遊

「来たばかりでお友達がないのね」と私に言つてくれたり、「ゆっくり話してあげて」というようなことを娘に話してくれたりしました（普段は同居している夫の父親が育児担当）。そのおかげか、翌日の夕方、出合つたときは女の子のほうから進んで手を差し伸べてくれ、本当にありがとうございました。愛佳がつづった初めての友達です。



保育の現場から

「カメさん、

おはよう！」で

## 始まつた幼稚園

黒川 愛

カメをよりどころにしながら生活する

記録 1 四月十六日（月）

入園初日にカメに気づいたゆうじろうは、それ以降、  
カメの水槽の近くで過ごすことが多い。カメの見える周  
りで遊び始めようとすると、ほかの人気が水槽に近づ  
くと慌てて水槽に戻る。

たくがカメのことが気になつて水槽をのぞきに行く  
と、ゆうじろうはひじで押して小競り合いが始まる。  
私が近くに行つて、「まあまあ、ここからでもよく見える

三歳児の保育室にはキンギョとメダカの水槽があり、  
保育室の前のウッドデッキには大小二匹のカメがいま  
す。入園間もないころ、子どもたちの多くはこうした小  
動物を近くで何となく眺めたり、餌をやつたりして過ご  
します。ゆつくりヒラヒラと泳ぐキンギョに心を寄せた  
り、餌をのんびりと食べるカメを見たりして、初めて通  
う幼稚園の環境に、それぞれのペースで安心して過ごせ  
る場所を見つけていっているのではないかと感じます。

三歳児のゆうじろうも、そんな一人でした。



から…」と二人の距離を離す。しばらくしてたくはその場を離れるが、ゆうじろうは水槽の近くに残る。

### 記録2 四月十八日（水）

ゆうじろうは登園すると、すぐにカメの所に行く。出席シールも貼つていなかつたので母親が誘うのだが、水槽から動かず、顔も向けない。私が近づき、「カメは逃げないから大丈夫よ」と言うのだが、「だつてー、触っちゃダメ！」と言つて、自分が気に入っている小さいはうのカメを誰かが触るのではないかと気にしている様子である。私が、近くにいたR先生に「ゆうじろう君ね、カバン直したらずぐに戻つてくるからカメさん見えていてね」と言って、ゆうじろうを抱っこすると、素直に抱かれて支度を済ませる。カバンをロッカーにしまい、慌て過ぎて人にぶつかりながら再び水槽の所に戻る。

を見て「おんなじね」などと言う。雄と雌との見分け方を私が声を出して読み、五歳児がカメを裏返すのをまねて尻尾の形状を見ている。五歳児が「これはメスだね」と言うと、ゆうじろうも「これはメスね」とまねる。

しばらく後、花壇の近くで数人の子どもとダンゴムシを探していた私は、大きなダンゴムシを見つけた人がいたので「こんなに大きなダンゴムシ見たことない！」など驚きの声を上げる。ゆうじろうは上履きのまま見に来て、慌ててカメの水槽に戻る。それでもダンゴムシが気になるようで「見たいな」とテラスから言う。私が「外の靴履いてこちらにいらっしゃいよ」と言うと、「でもカメが…」と言う。ちらちら気になしながら靴を履くとダンゴムシを探している人の所に行く。

おやつの時間になつて保育室に戻ると、真っ先にカメの水槽の所に行く。

### 記録3 五月八日（火）

朝、私よりもまずはカメにあいさつ。何とか誘つて支度を済ませると再び水槽へ…。私がペットショップでもらったパンフレットを持って行つて開くと、カメの写真

### 記録4 五月十日（木）

以前のような朝の慌てた様子もすいぶん落ち着いてきた。ただ、カメのことは気になるようで、支度が終わると水槽に直行する。私はまだゆうじろうとしつかりあい

さつをしていなかつたので「ゆうじろうくん、おはようございます。カメさんにもおはようした?」と尋ねる。

ゆうじろうは「誰もカメ触つとらんかった」と言い、

「あのなあ、(誰かがカメを)触つたらダメーって言うんよ」と言つていたずらっぽく笑う。私が「そんなに好きなのね。でもみんなでかわいがつてあげたらカメさん喜ぶのに」と言うが、その言葉には反応しない。

### ゆうじろうにとつてカメとは?

三歳児の多くは、まず「保育者と一緒に」とか「保育者のそばで安心して」といった姿であるのだろうと想像していました。もちろん、保育者を安定のよりどころにして徐々に自分の生活になつていく人もいましたが、ゆうじろうの場合はカメに支えられた部分が大きいと感じました。カメと過ごしたい気持ちの大きさを考えると、

それだけ新しい環境に自分の身を置くのに何かにすがつたり頼つたりするものがこの時期には必要であったのだと思います。このころのゆうじろうは、幼稚園に遊びに

来るとか、先生に会いに来るのはなく、「ぼくのカメ」に会いに来ていたのかもしれません。

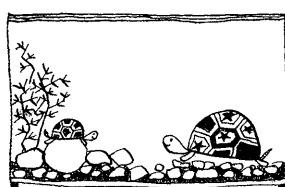
外での遊びが展開してくると、ゆ

うじろうは、そちらも気になり始めました。でも水槽から離れることに躊躇して、行つたり戻つたりし、い

つも上履きは泥だらけでした。五月中ごろになつて、やつと朝落ち着いて支度ができるようになり始め、カメとのあいさつが済むと、自分のしたいことへと気持ちと体が向くようになりました。カメと四六時中一緒にいなしても、距離が多少離れても、自分の生活ができるようになつてきたのです。

### カメを取り巻く面々

ゆうじろうははじめのころ、カメのことを怖がつて見ているだけでした。しかし、大きい人たちが平氣でカメを触つているのをじつと見ていたゆうじろうは、周りの



人の接し方をモデルにしながら、カメが危険な動物ではないと知つていくようでした。触れるようになると、今度は誰にも触られないよう持ち出したり、時にはカメにとつて残酷とも思えるようなことをしたりし始めた（コンクリートの上でカンナのようにカメを滑らせていたのにはびっくり！）。そのたびに話をし、また、カメの近くに行く人が少なくなつてきてからは落ち着いた関係がもてるようになりました。「ぼくのカメ」という言葉は自分とカメとの間でだけ流れる時間を求め、それを誰にも邪魔されたくないと願う気持ちの表れだったのかもしれません。そのうち幼稚園での生活が見え始め、自分の興味が広がり、カメと自分だけではない世界を摸索し始めているように見えました。

再びカメと…

その後のゆうじろうは、生き物にとても興味をもち、生き物が大好きになれると引き寄せられるようにくつつき、毎日網を持つて園庭の隅から隅まで行くようにな

りました。また、五歳児にくつついていっていろいろなことを教えてもらい、刺激も受けたようです。実ははじめのころ、ゆうじろうはほかの人気が捕まえた虫が入っている飼育ケースもお構いなく触つて、五歳児にしかられ、泣いたことも何度かありました。こうした経験や、大きい人のたくましく生き物とかかわる姿に触れて、ゆうじろうの虫に対する思いや知識などはさらに広がつてきましたようでした。

二学期になり、赤トンボが悠々と飛び始めたころ、私は、少し戸惑うことに出会いました。

#### 記録5 九月十八日（火）

うれしそうにゆうじろうが「アイせんせー、トンボ！」と赤トンボを見せる。「わー、すごい、飛ぶの速いだろうによく捕まえたわねー」と感心して言うと、「これで捕まえた」と網を見せる。飼育ケースに入れられたトンボはジッとしているのだが、ゆうじろうが触ると時どき羽をばたつかせる。ゆうじろうは、また飼育ケースを持って走つて行く。

帰りの集いが始まるころ、カメの水槽をのぞき込んでいるゆうじろうの姿が見えた。何を見ているのかなど、何の気なしに私も近づいてみる。すぐ横には、トンボが入っていた飼育ケースのふたが開けられたまま置いてある。水槽をのぞくと、カメが先程のトンボをくわえて、すごい勢いで食べているところだった。私が驚いてゆうじろうの顔を見ると、ゆうじろうも何も言わずに驚いた顔をこちらに向ける。少しの沈黙の後に、「カメさん喜んでいるけど：何だか私、悲しい気持ちになってきた…。ゆうじろう君はどんな気持ち？」と尋ねると、「悲しい気持ち…」と言う。「さあ、お帰り始まるから行こう」と言うと、黙つて私についてくる。

実はどうしてトンボをカメに食べさせたのか気になって半月後に本人に尋ねてみました。次の記録はそのときの会話です。

持ちだつたの？」の問い合わせに「嫌だつた」と言う。「何で?」「だつて食べるんだもん」。さらに私が「だつてあげたのはゆうじろう君でしょ」と言うと、「こうやつたら（口の近くに手を持つて）ホントに食べた」と言う。私が「もしかして食べるかどうかやつてみたの?」と尋ねると、「うん」と返事をする。私が「そつかあ、そうだつたんだ…。実はどうしてだらうなあつて気になつてたんだ」と言うと、返事をしないで立ち上がり、「池に行こう」と私に言う。

カメがトンボを食べたとき、私は何を言おうか、それとも何も言わないでおくべきか、どうしたらよいのか迷いました。実は今でもわかりません。トンボがカメの食料になることは当然起ることで、それはそれで私は受け入れられるのですが、どうしても「私は悲しい」の言葉になつてしましました。そのときのカメは、日ごろ子どもたちと与えている人工的な餌を食べるカメとはどこか違う、生命力が満ち溢れたような印象を受けました。

## 記録6 十月三日（水）

私が「ねえ、この間トンボをカメにあげたよね」と言うと、「うん」とゆうじろうが言う。「あのとき、どんな気

気持ちよくなるほど堂々とした食べっぷりに、その生命力をぶつけられたような複雑な気持ちになつて目が離せなくなりました。

カメの口から弱々しく出でている羽を見たからでしょう。その姿を見つめるゆうじろうは驚いているようにも、怖がつているように見え、おもしろがつているようには思えませんでした。ゆうじろうに何かひとこと言いたくなつて出たのが、「私は悲しい」という言葉でした。今思うと、私は、トンボが食べられて悲しいのではなく、悲しい顔をしているように見えるゆうじろうのことが悲しかつたのかもしれません。

ずいぶん日がたつてから尋ねたのに、そのことを覚えていたこと、また自分の気持ちを言葉で私に伝えてくれたことに驚きました。それだけゆうじろうにとつても強烈な出来事だったのではないかと推測されます。結果的に、トンボを目の前にちらつかせてみたら、たまたまカメが食べてしまつたということではないでしょうか。大

人から見たら少々残酷に見えるかもしれないし、生き物に対しても申し訳ない気持ちになります。しかし、ゆうじろうが出会つた数々の生き物たちは、生きていく生命力の素晴らしさも、命を頂くことのありがたさも、それから悲しさも教えてくれるものであつたのではないでしようか。

「先生来たよ」よりも「カメさん来たよ」で始まつたゆうじろうの幼稚園生活。今振り返つてみると、ゆうじろうが、カメを支えとして幼稚園に慣れてきたのだとわかります。そして、どんな生き物がいるのかと幼稚園中を探し回つて知つていくにつれて、ゆうじろうが安心して生活できる場が広がつていつているようでした。そういう力が生き物にはありますし、そんな出会いをゆうじろうは自分でつくってきたのだと思います。その姿を私はどう受け止めて、どうかかわっていくのか子どもたちと摸索していきたいです。

（山口大学教育学部附属幼稚園）

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (16)〉

# TURKISH DELIGHT (2)

## —トルコ視察・場面編—

菊地知子

ある日常の光景・日本にて

—「お約束」は誰のものか

昼下がりの、すいた電車に揺られる。斜め前に、早めに仕事を終え子どもをピックアップした帰り道

どうが、カチツとした黒のスーツに黒鞄、ひざには二歳前半と思しき男の子を抱いた女性が座つていた。その小さな男の子は、白い小さなラムネの粒を母親に手ずからもらい、口に含んではちよつと恍惚

としてうつらうつらし、溶け終わるや覚醒して「もつとちゅ（もうひとつ）」と小さな手のひらを母親に差し出す。母親は容器から出した一粒を、男の子の指につまませる。男の子はまた幸せそうに口に入れる。

何度目の「もつとちゅ」であったか、私には定かでない。しかしそれはおそらく九度目のそれであつたのだろう。「今のでもうおしまいよ。お、し、ま、い。十個のお約束だつたでしょ。もうおしまい

です。お、や、く、そ、く。男の子につられてうつかりうつらうつらしそうになつていて私は、その言葉と、それに続く男の子の泣きぐずる声によつて、しゃつきりと覚醒した。ラムネの容器はカラになるのを待たぬまま、土等そつなかばんにしまわれた。

約束なるものは、互いの思いに同じ有意さで交わされるものであると思つていた。しかしどうやら「命令です」とか「決まりです」と言うことはややはばかられるためか、代わりに「お約束」と呼ばれることがあることを、私たちは社会生活の中で日々経験している。「もつとちゅー」と泣きながら、母の胸で眠りについたその男の子が不幸であるかといえば、決してそんなことはないだろう。それでも私には、お約束という名の規制の存在そのものが、少なくとも教育とか子育てとか呼ばれる営みにおいては、あまり幸せな感じがしないなど思つてしまふ。

## トルコの地方小都市での光景

—キツネは何との約束に生きているか  
中部アナトリア地方の大地で、高みから、起伏の大きい岩場を走るキツネを見た。キツネは素早く走り、岩穴へ入つていった。そして、そのすぐ後には、地に近く低く茂るブドウの木を見た。私は、先のキツネが、野生に生きることを許されたキツネ、自分を生かす大地との約束に生きるキツネであることを確信した。

イスタンブールでの、子育て中の父親への聞き取りによると、トルコの人は、ブドウを高濃度に煮詰めたエキスを、滋養強壮のため大人も子どもも薬のように食するのだそうだ。あらゆる動植物の活動の源たるブドウ糖の名は、当然ブドウに由来し、熟したブドウの実には多量のブドウ糖が含まれる。人には限らず動植物が、その生命保持に多いに役立つブド

ウ糖を効率よくブドウから取る知恵を古くからもつていたことは想像に難くない。そしてまた、聖書にあるがごとく、ブドウの木の一枝一枝が、さらには実の一粒一粒が、大地（あるいは偉いなるもの）とのつながりにおいて自らが生かされていることを知る、そのブドウである。

さらに余談めくが、小アジアと呼ばれる現在のトルコの地に、紀元前に生まれたであろうイソップの寓話の中に、キツネとブドウの話がある。棚のブドウが取れずに「あれはすっぱくてとても食べられないものではない」とキツネが負け惜しみを言うという、あの話である。強がりを言うキツネの姿はそもそも哀しい。それをさらに「いいざまだ」とあざけるためだけに、人の叡智が紀元前からこの話を語り継いできたとは思えない。他者の悲しみを自らも引き受けつつ昇華していくような精神の働きに、人間の人間らしさがあると、地に近く生える、限りなく

野生種に近いであろうブドウの木を見て、私は改めて思う。キツネには、ブドウ棚に作られたブドウは取ることができない。農耕や牧畜という、人間にによる約束事に成り立つ社会からは締め出され、入り込めば悪者になる。しかも、もはや野生にのみ生きることはできないキツネの哀しみ、ブドウ棚にブドウをこしらえる人間との約束にもまた生きられないキツネの生まれいづる悲しみを、この寓話もまた、示しているのではないか。

いずれにしても、岩場の大地で目にしたキツネは、自分を生かす、自分が生きることを許された大地、あるいは自然との約束に生きている、そう私には思えたのだった。

### 再び日常の光景・イスタンブールにて

—子どもは何との約束に生き得るか

イスタンブールの中心にある公園でのこと。これ

でもかこれでもかとばかりに、目前に姿を現す子どもの数の多さと、繰り広がる光景の興味深さとに、同僚と私とは、もはや集中力が持続せずぼんやりとベンチに並んで座っていた。

そんな私たちのすぐ近くでは、三歳くらいの男の子が、植え込みの葉っぱやすれ違った人に気を取られて振り返つたり立ち止まつたりしながら、家族が歩く後ろを、おそらくは帰り道の方向に歩いていた。その子が、すぐ前を歩いているはずの母親を確認しようと視線を移動したそのとき、二人の異邦人が自分のほぼ真横で、自分のことを疲れたまなざしで見ているのが目に入ってしまった。男の子の真ん丸な目と、目を合わせてしまつた私たちは、同じく目を真ん丸にして息を飲んだ。母親は、自分の思いよりも少しばかり遠い所を歩いている。赤ん坊を抱いた父親や連れの大人たちは、それよりさらに先にいる。

「約束が違うじゃないか」との思いで彼は嘆きたいのだった。彼にとつての約束とは即ち、近しい他者の自信、などと私たちが呼ぶ類のものである。私たちの視線を確認したことが、「約束が違う」という彼の思いに追い打ちをかけたことも、ほぼ間違いないだろう。隣で息を飲んだままでいる同僚が、「お母さんまでの、男の子からの距離が）ちょっと遠かつたよねえ。あたしたちは近過ぎたし」と、かなり同情的に、残念そうに私にささやく。

男の子は、これ以上の落胆の表現はない、と思えるほどに、がくん、と首をまっすぐ下にうなだれて見せた。ややあってスイッと顔を上げ、母親を呼び、今一度私たちを確認し、また見事なほどの落ち込みようで、ガクン、と頭を垂れる。しばしの静止。そしてもう一度顔を上げる。母親は、思いの外離れた所にいたわが子に（といつてもせいぜい十

メートル足らずであるが）少しだけ近づき、声をかける。まだ納得がいかない。何も言わないが、「だって約束が違つちやつたんだよ、おかあさん」という声が聞こえてくる気さえする。もう数歩、母親は男の子に近づいた。男の子はガシッと母親の太

ももをつかまえ、頭やら肩やら腕やらをヨシヨシとさすられ、でれでれに甘えている。多くのトルコ女性の常で、スカーフを顔に巻いたその母親は、慈愛に満ちた深い瞳を笑った形にし、案外力のある腕の片方でひょいとその子を抱き上げて、スタッタと、淡々と、家族の待つ方へと歩いていった。互いに同じ有意さで約束は成り立つたらしい。

### 文脈を違えずに

異文化たる他者を見るということ

—私たちは誠実にトルコに学べるか

トルコの人は、問えば皆、「自分は子どもが好き

だ」と言う。年配者や子どものいる人は言うに及ばず、十九歳の携帯ショップの店員が、また、社会学を学ぶ三十過ぎの青年が、祖母の故郷を訪ねて旅をする二十歳前後の若く美しい三姉妹が、聞けば例外なく目を細め、「自分は子どもが大好きだし、トルコ人は皆子どもが大好きだ」と言う。「好きか」と問われて否定形で答える、ということを、あるいはトルコの人は考えないだけのことなのかもしれない。それにしても、彼らは概して、人を馬鹿にしない人たちだ、と思う。朴訥であるとか純朴であるとか、そういう言葉もあるいは彼らの人柄を言い得てゐるかもしれない。子どもとの関係もしかり。侮つ



たり、見くびつたりはしないし、共感の示し方はさりげなく淡々としていて、決して大仰ではない。

トルコの料理は、ところで、種類の多さも質も、実に豊かだ。菓子の類もまたしかりである。現地ではロクムと呼ばれるTurkish delight。残念ながら私たちは、トルコ滞在中に食べることはおろか、その後イギリスのキオスクで見かけるまで、その存在を認識することさえもしなかつた。イギリスで立ち読みしたレシピ本によれば、材料はコーンスターチ、大量の砂糖、レモン汁、バラ水など。材料と作り方から察するに、日本の求肥や直方形のゼリーなどのような、クニユクニユした食感の甘いお菓子であると思われる。十三世紀ごろからあるといい、それをあるときイギリス人がおいしさに驚いて持ち帰り、その名をつけたということだ。英國の名高い児童文学に描かれた、少年が魅了され餓鬼ながらに食べるさまは、この菓子や菓子を生んだ國の他國との歴

史も含め、その実態の隠喩足り得るだろう。

野生のキツネには到底かなわないが、人の子が、何がしかの枠組みとの約束よりも人そのものとの約束に生きることが、まだ緩やかに許されている。その姿は、覚えのない畏れを、なるほど私たちに抱かせ得る。素材の良さが生き、奇をてらわずシンプルで、確かにおいしいであろうその菓子はまた、魅惑的で食べたら虜にされてしまうような、言うに言わぬ魔性をも感じさせるに充分であるかもしれない。

しかし、と私は思う。私たちが異文化としての他人に触れるとき、それを大切に引き取り考える誠実さこそが、互いを生かす、それゆえに果たすべき「約束」としてあるのではないか、と。異質でありながら非常に深く共感も覚えるトルコの、子どもを取り巻く社会のありように触れ、そんなことを考えたのだった。

(お茶の水女子大学)

## 編集後記

テレビや絵本を、子どものメディアとして特集した。昭和39年、まだ幼児だった私は、白黒テレビで東京オリンピックを両親と一緒に興奮して見ていた。エチオピアのマラソンの金メダリスト、アベベの名前を大切な茶色い犬のぬいぐるみにつけた。また、テレビのニュースでケネディ大統領の暗殺が報じられた瞬間の、両親の驚いた様子は忘れない。事件の画像を見たときの恐怖感も覚えている。

幼児期の私にとって、テレビは、両親の生きている世界のはかり知れなさ、緊張感や不思議さを垣間見ってくれるものだった。それに比べて絵本は、こちらの歩調に合わせて近づいてくれる、しかし不可思議なことも多い、やはり外側の世界からのメディア（媒介物）だった。 (H)

## 幼児の教育 第107巻 第4号

平成20年4月1日発行

編集兼発行人 浜口順子

編集部 河合聰子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所 株式会社 フレーベル館

☎03-5395-6604 (編集)

振替 00190-2-19640

印刷所 図書印刷株式会社

定価 550円 (本体524円)

©日本幼稚園協会 2008 Printed in Japan

表紙絵 佐藤奈々

扉カット 佐藤奈々

扉題字 津守 真

カット 斎藤明子

編集委員 伊集院理子

上坂元絵里

ご購入のお問い合わせは、

フレーベル館までお願いします。

☎03-5395-6613 (営業)

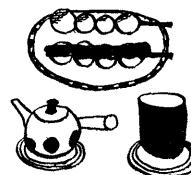
## 次号予告

・子幼児とともに「うたう」こと 庄司康生

・壱岐島便り（1） 田内英理子

・若手研究者からの報告（4） 坪井 瞳

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。



## おたより大募集

ご意見ご感想をお寄せ下さい。今月号の中で、特によかったもの、取りあげてほしい内容などもお知らせください。本誌へのご投稿もお待ちしております。

はがき：〒113-8611 東京都文京区本駒込6-14-9 (株) フレーベル館

「幼児の教育」編集部

Fax : 03-5395-6622 E-mail : youjimail@yahoo.co.jp

好評発売中!

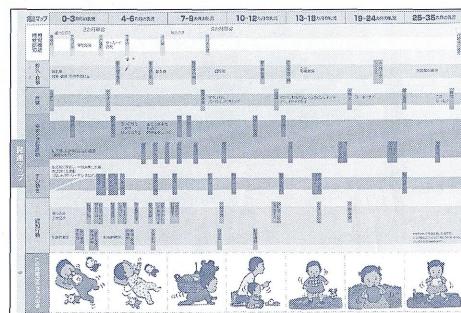
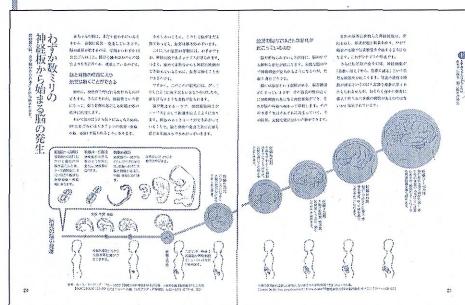
## フレーベル館 創立100周年記念出版

-----幼児教育とともに歩んできた100年  
そして未来の子どもたちを支える100年に-----

# 乳児保育の基本

汐見稔幸・小西行郎・榎原洋一  
責任編集

従来の乳児保育の経験的な「知」と、赤ちゃん学や脳科学などの「最新の知識」を融合させ、新しい乳児保育の姿を明示します。  
ワイド版・全8章・512頁のボリューム、  
豊富なイラスト・写真・図版で、ていねいに  
わかりやすく説明します。



キンダーブックの

### フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・社社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

本邦初、赤ちゃん学・脳科学などの  
最先端知識を取り入れた、  
新しい「乳児保育」の実践・工夫を提案!!

The fundamentals  
of infant  
childrearing

乳児保育の基本

# 乳児保育の基本

責任編集 汐見稔幸・小西行郎・榎原洋一

フレーベル館

102-30

27×22cm/512頁

定価4,935円(税込)

#### <もくじ>

- 1章 赤ちゃんはおもしろい
- 2章 乳児保育の実際
- 3章 乳児保育の環境構成
- 4章 園が担う親支援
- 5章 乳児虐待の実際と対応
- 6章 乳児期からの障害児保育
- 7章 乳児をめぐる現代的課題
- 8章 乳幼児と病気

最 新 刊

今すぐ役立つ☆保育ナビブック「Nocco」から生まれた

# Nocco ノッコ セレクト vol.1

いぬかい せいじ たかさき はるみ

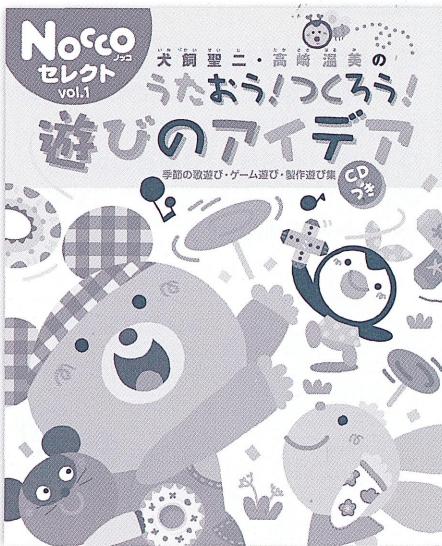
犬飼聖二・高崎温美の  
うたおう! つくろう!

## 遊びのアイデア

(CDつき)

歌遊び、ゲーム遊び、  
製作遊びの、明日からすぐに  
役立つアイデア集です。

- ① 豊富なアイデア
- ② 具体的な説明
- ③ 実践ポイントつき



106-01

26×21cm/80頁  
定価2,415円(税込)

《以下続刊》

Noccoで好評の連載が、続々登場します!

### ●7月刊行予定●

クリーミィメロンパンの 0~2歳児 ワクワク手遊び (CDつき) (仮題)  
クリーミィメロンパンの 3~5歳児 ワクワク手遊び (CDつき) (仮題)

その他、製作アイデア集、おたより文例集、造形アイデア集などが登場します。ご期待ください!

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。